

後漢鏡における淮派と吳派

岡 村 秀 典

はじめに

1. 「青蓋」の展開
 - (1) 「青蓋」の自立
 - (2) 盤龍紋の出現とそのひろがり
 - (3) 盤龍鏡の出現とその銘文
 - (4) 「青蓋」の分解と再編成
 2. 吳派の成立と展開
 - (1) 「吳朱師」鏡
 - (2) 「吳向里栢師 (柏氏)」鏡
 - (3) 「吳何陽周是 (氏)」鏡
 3. 漢鏡 6 期における吳派と淮派の交流
 - (1) 「石氏」畫像鏡の出現と展開
 - (2) 「石氏」盤龍鏡の展開
 - (3) 漢鏡 5 期から漢鏡 6 期にかけての編年
 4. 江南における神獸鏡と八鳳鏡の出現
 - (1) 「吳郡胡陽張氏元公」の神獸鏡
 - (2) 「趙禹」八鳳鏡
 - (3) 華西系から江南系へと展開した八鳳鏡
- おわりに

は じ め に

日本考古學の礎を築いた濱田耕作〔1922〕は、近代の考古學研究は古典古代の美術史研究のなかからはじまったと指摘している。すなわち、ギリシア・ローマ彫刻にかんする研究は、ルネッサンスから 18 世紀までは文献記録や銘文をもとに進められてきたが、ドイツのヴィンケルマンが 1763 年に出版した『古代美術史』において、彫刻の觀察にもとづいて様式の發達を跡づけたことにより、考古學的研究がはじまったというのである。

美術史は、繪畫にせよ彫刻にせよ、個々の作品を觀察することからはじめ、その作者やその時代様式に議論がおよぶ。文學においても、その方法は同じである。とくに作者のわかっている作品については、その個性や藝術性に着目して研究されることが多い。

これにたいして考古學では、遺跡にせよ遺物にせよ、研究對象とする資料の数が多く、

作者のわからないものがほとんどであるため、自然科学でおこなわれているような屬性分析の方法によって考古資料を分類し、型式という集合体をもって議論することが多い。近年ではコンピューターを利用して分類することもさかんで、分析の客観性がますます重んじられている。濱田耕作の想定した美術史と考古學とのちがいは、この對照的な研究方法によるところが大きいのではないかと筆者は考えている。

かつて筆者〔岡村 1993〕は後漢代の方格規矩四神鏡や内行花紋鏡について、紋様を単位ごとに分解し、その變化とそれぞれの相關關係を分析することによって細かい編年を組み立てた。これをうけて上野祥史は、漢鏡 5 期から 6 期にかけて流行した盤龍鏡〔上野 2003〕と漢鏡 6 期から 7 期にかけての畫像鏡〔上野 2001〕を分析し、華北東部地域や錢塘江流域などの地域系列に分けた。また、岸本泰緒子〔2006〕は漢鏡 5 期に浮彫式獸帶鏡の制作系統が多様化したことを明らかにした。

漢鏡 5 期から 6 期にかけて盤龍鏡・浮彫式獸帶鏡・畫像鏡が出現し、それらの紋様が多様化することについて、上野や岸本は制作地のちがいと考えた。しかし、そのような鏡には「青蓋」や「杜氏」、「柏氏」などさまざまな作鏡者名が銘文に記されていることからみれば、鏡の多様化は、むしろ作鏡者の個性に由来するところが多いと考えられる〔岡村 2010〕。本稿で論じるように、この時期には淮派と吳派とが並立していたが、いずれも多くの個人工房が自立し、鏡工たちが腕を競い、表現の異なる作品が制作されていた。また、それぞれの鏡工たちは流派をこえて交流しており、吳派の鏡工が淮派の盤龍鏡をほとんどそのまま受容することもあれば、淮派の鏡工が吳派の創出した畫像鏡を受容し、やがてそれに同化していくこともあったのである。盤龍鏡や畫像鏡の紋様だけを見てみると、淮派か吳派か區別のつかないものが多いし、遠隔地までひろく鏡が流通したから、紋様の分類と出土地から制作地を特定することはむずかしい。

鏡に作者名を記したのは、鏡工たちが民間の市場に向けて創作力を競いあい、作品の特長を顯示しようとしていたからであろう。その藝術性を酌みとるため、本稿では、考古學の方法によって機械的に紋様を分類することからはじめるのではなく、銘文に記された作者名を手がかりに、作者個人の遍歴を追跡する美術史の方法を採用したいと思う。

1. 「青蓋」の展開

(1) 「青蓋」の自立

もともと宮廷御用品をつくる官營工房の「尙方」は、王莽代に方格規矩四神鏡の制作をはじめた。それは天圓地方の宇宙をあらわした鏡で、方格には方位を示す十二支銘があり、内區には細線表現の青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を東西南北の方位に合わせて

配置している。四神の役割は王莽代の「尙方」方格規矩四神鏡の銘文（集釋 446）に、

左龍右虎辟不羊。 左龍と右虎は不祥を辟く。
朱鳥玄武順陰陽。 朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

とあるように、青龍と白虎は不祥なるものをしりぞけ、朱雀と玄武は陰陽を調べて宇宙の循環を秩序づけると考えられていた。

しかし、後漢代になると、「尙方」では依然として方格規矩四神鏡の生産をつづけているものの、その圖像紋様や銘文はしだいに簡略化していった。1世紀中ごろの方格規矩四神鏡 VB 式では、四神の一部が脱落したり、四神と瑞獸との組合せが不完全になったりし、1世紀後葉の VC 式では主紋がすべて鳥紋や渦紋に退化している〔岡村 1993〕。同時に方格からは十二支銘が失われていった。方格規矩四神鏡の生産はなお「尙方」の独占がつづいていたものの、本来の宇宙観は形骸化していったのである。また、ほとんどの銘文が樋口隆康〔1953〕分類の銘文 K に畫一化していった。その原形は、

尙方作竟眞大好。 尙方 鏡を作るに、眞に大いに好し。
上有仙人不知老。 上に仙人有りて老いを知らず。
渴飲玉泉飢食棗。 渴いては玉泉を飲み、飢ゑては棗を食らふ。
浮游天下敖三海。 天下に浮游し、四海に敖ぶ。
徘徊名山采芝草。 名山を徘徊し、芝草を採る。
壽如今石之天保。 壽は金石の如く、天の寶に至らん。

という王莽代の銘文（集釋 451）である。それは仙人の生態をあらわした内容で、四神と瑞獸を主とする方格規矩四神鏡の圖像とは必ずしも一致していなかった。

畫一的な「尙方」鏡の生産に失望したのが、「青蓋」を自稱する有志の鏡工たちであった。「青蓋」とは、すぐれた金屬をあらわす吉祥語「青祥」の假借で、それをグループの雅號としたのである。かれらは形骸化しつつあった方格規矩四神鏡ではなく、獸帶鏡をもっぱら制作した。どちらも四神をはじめとする瑞獸で主紋を構成しているが、圓圈鈕座の獸帶鏡のほうが方位の縛りをもたない配置の自由さがあったからである。すでに論じたように〔岡村 2010〕、「青蓋」が「尙方」に所屬していたときに制作した獸帶鏡には、

尙方作竟大毋傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親樂富昌。壽蔽金石如侯王。青蓋爲志何巨央。（集釋 505）

という銘文があり、冒頭に「尙方作」と明記しながら、最後を「青蓋の志を爲す、なんぞ央うきん」と結んで「青蓋」の志の大きさをあらわしたのである。この鏡は永平七年（64）細線式獸帶鏡（巖窟 2 中）とほぼ同じ紋様表現と構成をもつことから、その年代は 60～70 年代に位置づけられる。また、これは樋口分類の銘文 L であり、「左龍と右虎は不祥を辟く。朱鳥と玄武は陰陽を順ふ」の句は内區をめぐる四神の圖像をあらわし、「子孫

は備具し、中央に居らん。長く二親を保ち、楽しみ富み昌えん」の句は家の繁榮を願う儒家の主張を反映したものである。これは王莽代の銘文の再利用ながら、銘文 K を用いつづけた「尙方」方格規矩四神鏡とのちがいをあらわそうとする意圖がかいま見える。

(2) 盤龍紋の出現とそのひろがり

「青蓋」はさらに細線式獸帶鏡の鈕座に浮彫表現の盤龍紋をとり入れた。「青蓋」が「尙方」に属していたときの獸帶鏡（小校 15-28）の銘文は、

尙方作竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親樂富昌。宜侯王兮。（集釋 501）

とある。これとほぼ同じ紋様構成をもつ「青蓋」獸帶鏡（小校 15-58）は、この「尙方」鏡よりわずかに径が小さいが、その銘文は、

青蓋作竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親樂富昌。壽敝金石如侯王。（集釋 506）

とあり、「尙方」を「青蓋」に置き換えて末句を完全な 7 字句に増やしている。これに類似するのが湖北省鄂州市鄂鋼 630 工地出土の「青蓋」獸帶鏡（鄂州 73）で、圖 1-2 にその鈕座を示した。龍と虎が口を開けて對峙し、反對側には龍の上半身があらわされている。また、北朝鮮ピョンヤン市貞柏里 2 號墓から出土した「青蓋」獸帶鏡〔朝鮮總督府 1927：圖版 555〕は、外區の唐草紋と乳の四葉紋はめずらしいが、これとほぼ同銘である。鈕座には對峙する龍虎が 2 組あらわされている（圖 1-1）。これら 4 面の獸帶鏡は岡村分類の細線式獸帶鏡Ⅳ A・Ⅳ B 式に屬し、その手法が類似することから、「尙方」から「青蓋」が獨立する前後の連作鏡で、浮彫表現の盤龍紋を創出したのは自立直前の「青蓋」であったと考えられる。それはおよそ明帝のころ、60～70 年代のことであろう。

ここで注意しておきたいのは、盤龍紋の龍と虎の表現である。「青蓋」鏡の龍は、1 角のものと 2 角のものがあるが、どちらも角の先端が少し彎曲し、根元に細かい平行線紋をいれること、頭は斜め上からみた形で、龍の額がハート形を呈し、アーモンド形の兩眼が突起すること、首から丸い背中にかけて鱗があり、その下から「し」字形に曲がった足が伸びる、という特徴をもつ。これにたいして虎は、丸い頭を斜め横からみた形で、口を大きく開き、丸く突起する兩眼をもち、首には 2 本線で縞模様をあらわし、胴部と鈕座とのあいだから足がまっすぐ伸びている。上野祥史〔2003〕は角が 2 本の龍を表現 3a、1 本の龍を表現 3b とし、龍が右にある型式 3BR を西方青蓋系、左にある型式 3BL を東方青蓋系としたが、その分類には意味がない。しかし、このような龍虎の表現は、「青蓋」のほかにも後述の吳派などにひろく採用されており、本稿ではこれを青蓋系の龍虎紋と呼ぶことにする。

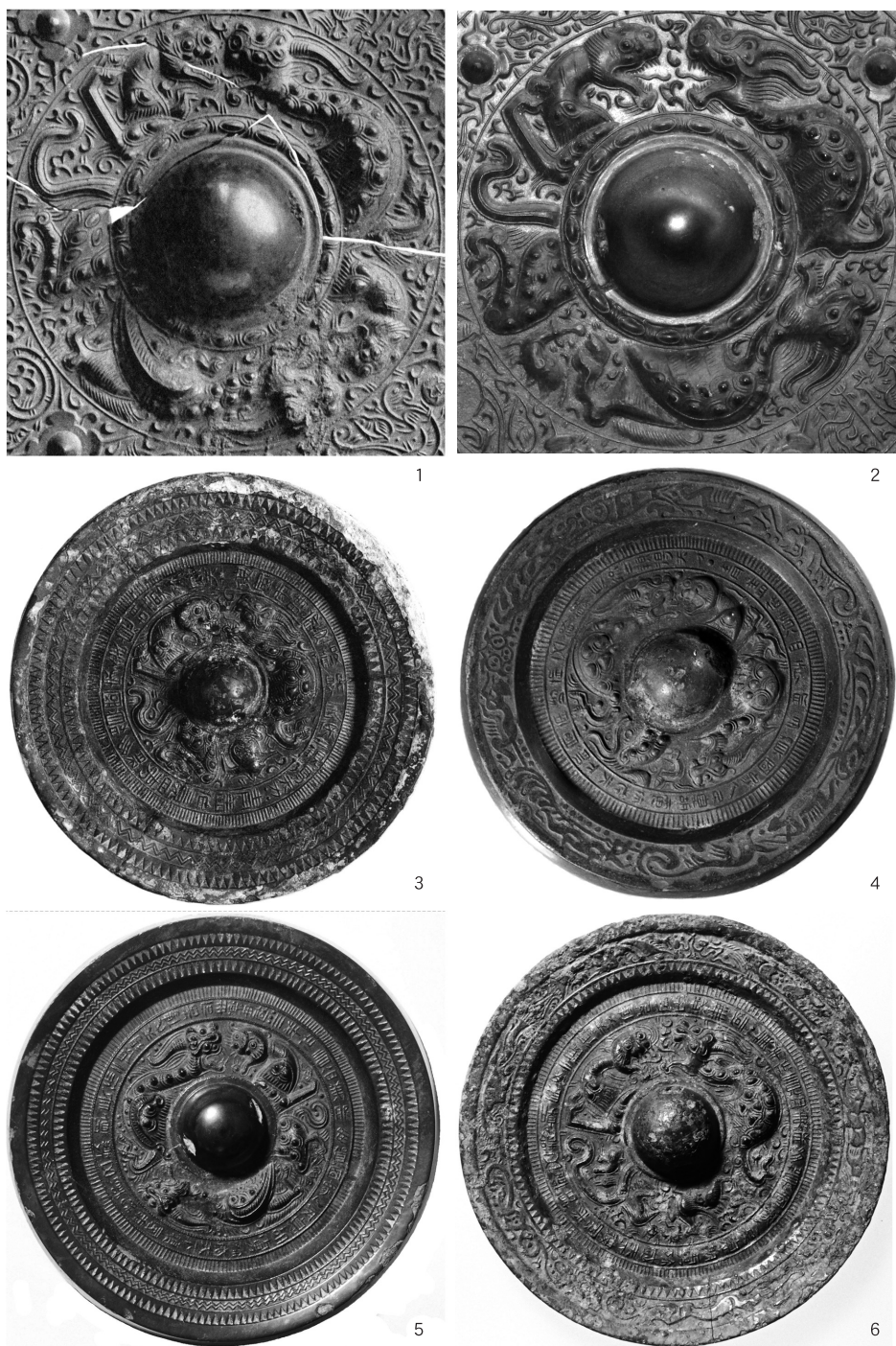


圖1 青蓋系の盤龍紋 1:北朝鮮ピョンヤン市貞柏里2號墓出土「青蓋」獸帶鏡〔朝鮮總督府1927:圖版555〕, 2:湖北省鄂州市鄂鋼630工地出土「青蓋」獸帶鏡, 3:岡山縣鏡野町赤峪古墳出土「青蓋」盤龍鏡〔湊哲夫1990:6〕, 4:浙江省永康縣出土「青蓋」盤龍鏡(浙江96), 5:和泉市久保惣記念美術館藏「三羊」盤龍鏡, 6:岡山縣總社市宿寺山古墳出土「黃羊」盤龍鏡

ただし、鈕の反対側は、いくつかのバリエーションがある。圖 1-1 は龍と虎の對峙する形であり、圖 1-2 は龍の上半身があらわされている。その龍や虎は、いまみた表現と同じである。このような龍や虎のかわりに、麒麟、仙人、熊などが配置されることもある。その實例はのちに順次みていくことにしたい。

この「青蓋」とほぼ同じころに自立した鏡工が「三鳥」と「池氏」である。圖 2 左の「三鳥」細線式獸帶鏡（桃陰 19）は、龍と虎が對峙する盤龍紋を鈕座にもち、7 乳で區畫した主紋帯には四神をふくむ瑞獸を配置し、細線式獸帶鏡Ⅳ A 式に屬している。この盤龍紋は「青蓋」のそれに近い表現をもつが、外區には日月五銖錢紋で 4 區畫した獨特の畫像紋を配している。鈕座と主紋帯とのあいだには銘帯があり、「:」記號につづいて、

三鳥作竟與衆異。黍子百孫□天力。貴至三公尙御竟，壽如金石樂無極。（集釋 544）
という特異な銘文をいれている。作鏡者の「三鳥」は太陽を象徴する三足鳥を雅號とした工房名。第 3 句の「尙御鏡」は「方」字を脱した「尙方御鏡」であり、「三鳥」は「尙方」から自立したのち、その委託をうけて本鏡を制作したのだろう。

圖 2 右は河南省新野縣沙堰郷出土の「池氏」細線式獸帶鏡〔劉紹明 1996〕で、同じように盤龍紋の鈕座と畫像紋の外區をもつが、盤龍紋は 1 頭の龍だけで、日月五銖錢紋で 4 區畫した外區には「天公」・「何（河）伯」の圖像と榜題があつて、ほかに例をみない獨特の宇宙をあらわしている。主紋は四神から玄武が脱落し、岡村分類の細線式獸帶鏡Ⅳ B 式に屬している。内區外周の銘文は、

池氏作竟大母傷。天公行出樂未央。左龍右虎居四方。子孫千人富貴昌。（集釋 515）
とあり、外區の圖像を「天公行出」と記している。このように「三鳥」と「池氏」は「青蓋」にならって盤龍紋の鈕座をもつ細線式獸帶鏡を制作したが、外區の畫像紋をはじめ



圖 2 淮派の細線式獸帶鏡 左：寧樂美術館藏「三鳥」鏡，右：河南省新野縣沙堰郷出土「池氏」鏡〔劉紹明 1996〕

め、その圖像表現や銘文にはそれぞれの個性が十分にあらわれている。その「池氏」は漢鏡6期はじめまで鏡の制作を継続したが〔岡村2010〕、「三鳥」の作品はほかに例がなく、短期間のうちに「三鳥」工房は廢絶してしまったらしい。

(3) 盤龍鏡の出現とその銘文

鈕座の盤龍紋を内区の主紋としたのが盤龍鏡で、それを創作したのも「青蓋」であろう。その圖像表現が「青蓋」細線式獸帶鏡の盤龍紋と類似しているからである。陝西省勉縣紅廟の後漢墓から出土した「青蓋」盤龍鏡〔唐金裕ほか1983〕は、岡村〔1993〕分類の盤龍鏡ⅠA式に屬する初期の例で、同じように樋口分類の銘文Ⅰをもっている。初期の「青蓋」盤龍鏡には、ほかにも樋口分類の銘文Paや銘文Kが若干ある。

しかし、「青蓋」盤龍鏡でもっとも多くみられる銘文は、樋口分類Nである。それは王莽代に出現した七言句の銘文で、集釋454には、

王氏昭竟三夷服。	王氏の昭鏡あり、四夷服す。
多賀新家人民息。	多く新家を賀し、人民息ふ。
胡虜殄滅天下復。	胡虜は殄滅して、天下復す。
風雨時節五穀孰。	風雨は時節あり、五穀熟す。
長保二親子孫力。	長く二親を保ちて、子孫 祿あり。
傳告後世樂母亟兮。	後世に傳告し、楽しみ極まり母し。

とある。これは王莽が發注した鏡であり、王莽の新王朝の樹立によって天下が安定したことを賛美している。王莽を倒して漢王朝を再興した後漢代の「青蓋」鏡では、最初の2句を「青蓋作竟四夷服。多賀國家人民息」と改めているが、仙界の様子をあらわした樋口分類Kや四神の役割を記した同Ⅰと對比して、銘文の内容が大きく異なっている。鏡の圖像にまったく関係しない王朝賛美の銘文がふたたび採用されたのは、建武二十四年(48)に南匈奴の呼韓邪單于が内屬し、天下統一をはたした光武帝が建武三十二年(56)に泰山で封禪をおこなうといった社會の安定化に大きな要因があるのだろう。この銘文は筆者〔岡村2010：圖1-5〕の示した「青蓋」細線式獸帶鏡ⅣB式にも用いられている。

したがって、「青蓋」盤龍鏡は、細線式獸帶鏡ⅣB式と同時期の、およそ70年代に出現したと考えられる。その銘文は、いずれも王莽代の七言句を繼承しているとはいえ、先行する「尙方」方格規矩四神鏡が銘文Kに收斂していったのとは對照的に、多様性をもっていた。その多様性は圖像紋様にも看取できる。しかし、まもなく「青蓋」盤龍鏡は儒家的な言説の銘文Nに限定され、「青羊」・「黄羊」・「三羊」など「青蓋」と同系の吉祥語を商號とした工房が新たに出現することになった。

(4) 「青蓋」の分解と再編成

「青蓋」盤龍鏡は、細線式獸帶鏡の鈕座の盤龍紋をとり入れたために、龍と虎が口を開けて對峙する圖像の構成と表現をそのまま繼承している（圖1）。

圖1-3は岡山縣鏡野町赤峪古墳から出土した「青蓋」盤龍鏡〔湊哲夫1990：6〕である。向かって右に2角の龍、左に虎があり、鈕の反對側には腹の大きい熊が鈕座に足を置き、兩腕をひろげて立っている。龍や虎の表現は、圖1-1や圖1-2と比べると、やや簡略化しているが、上述の基本はなお繼承されている。外區は三重の鋸齒紋である。樋口分類の銘文Nは5句あり、「：」記號につづいて時計回りに展開している。

圖1-4は浙江省永康縣出土の「青蓋」盤龍鏡（浙江96）である。この鏡を特徴づけるのは外區の畫像紋で、寫眞の左下から反時計回りに、九尾狐、鳥、羽人、雲氣、鳥、羽人、魚、雲氣、蟾蜍、羽人がめぐっている。外區の畫像紋は漢鏡4期の方格規矩四神鏡や漢鏡5期の細線式獸帶鏡に散見するが、盤龍鏡ではめずらしい。主紋の龍と虎は、左右逆轉した配置となっているが、表現は同じである。鈕の反對側には1角の龍があらわされている。樋口分類の銘文Nは5句あり、「・」記號につづいて時計回りに展開している。

圖1-5は和泉市久保惣記念美術館の「三羊」盤龍鏡である。主紋の構成や表現は圖1-4と同じで、外區は圖1-3と同じ三重の鋸齒紋であるが、銘文の作鏡者は「三羊」になっている。その銘文Nは6句と長く、「：」記號につづいて時計回りに展開している。

圖1-6は岡山縣總社市宿寺山古墳から出土した「黃羊」盤龍鏡である。外區には影繪風の獸紋を反時計回りにいれ、銘帯が断面かまぼこ状に隆起しているのがめずらしい。外區の獸紋は筆者〔岡村2010：圖2〕のとりあげた「杜氏」鏡などのそれに表現が類似するものの、伝統的な四神をあらわしているところが保守的である。内區主紋の龍と虎は圖1-3と同じ構成と紋様で、鈕の反對側には麒麟のような獸とそれに向かいあう仙人があらわされている。この副紋も頭を外に、足を鈕座に向けている。しかし、この作鏡者は「黃羊」であり、「・」記號につづいて6句の銘文Nが時計回りに展開している。

以上4面の盤龍鏡には、作鏡者として「青蓋」とそれに關連した「三羊」や「黃羊」が記されている。圖示していないが、ほかに「青羊」が同じような盤龍鏡を制作している。いずれも主紋の龍虎表現が類似するだけでなく、樋口分類の銘文Nを5～6句いれることが共通しているため、鑄造の吉祥語を工房名とした「青蓋」・「青羊」・「三羊」・「黃羊」はきわめて近い關係にあったことがわかる。その「青蓋」についてカールグレン〔Karlgrén 1934：no. 120〕は、「蓋」字は「羊」と「皿」にしたがう「羊」の繁字で、「祥」の假借とし、笠野毅〔1993〕はこれを援用して「青蓋」と「青羊」とは同一工房とみなした。「青羊」は、圖1-2「青蓋」獸帶鏡とほぼ同じ紋様構成をもつ獸帶鏡〔容庚1935：1a〕を制作しており、「青蓋」の自立後まもなく「青羊」も存在したのである。しかし、その



圖3 「青蓋陳氏」の鏡 左：長沙市絲茅沖8區15號墓出土浮彫式獸帶鏡〔周世榮1986：122〕，右：長沙市南郊公園4號墓出土盤龍鏡（長沙95）

鈕座には龍虎の反対側に麒麟と小鳥を配しており、「青蓋」の盤龍紋とはわずかに異なっているため、「青蓋」と「青羊」とは別の鏡工であった可能性もある。したがって、各工房の出現はおよそ「青蓋」・「青羊」が60～70年代、「黄羊」・「三羊」がおよそ70～80年代と考えられる。すなわち、有志の鏡工たちで組織された「青蓋」ではあるが、まもなく「青羊」が自立し、やがて「黄羊」・「三羊」が獨立していったのである。

なお、「黄羊」の假借とみられる「黄陽」制作の元和四年（87）銅壺が、山東省蒼山縣柞城から出土している〔劉心健ほか1983〕。その銘文は、

元和四年，江陵黄陽君作，宜子孫及酒食，吏人得之，致二千石，古人得之，致二千萬，田家得之，千厨萬倉。

とあり，作器者は「江陵」の「黄陽君」であった。「江陵」は荊州南郡の郡治が所在した長江中流域の中核都市であるが，「青蓋」ら淮派の活動地から離れているし，四言の吉祥句からなる銅壺の刻銘と七言句からなる「黄羊」鏡とは共通する語句がほとんどないため，「黄陽君」と「黄羊」とが同一工房であったとは考えがたい。とはいえ，「黄羊」盤龍鏡はこの銅壺とほぼ同時期で，鑄造の吉祥語を雅號とした工房が出現した背景に，共通する要因が存在したことはまちがいないだろう。

漢鏡5期末から6期はじめには，淮派の再編成が進められた。「杜氏」らに近い盤龍鏡や畫像鏡をつくっていた「宋氏」は，漢鏡6期に「三羊」と提携し，独自の銘文を繼承しながら，上述の「青蓋」鏡に近いモチーフをもつ「三羊宋氏」盤龍鏡（小校15-55b）を制作した〔岡村2011：圖1〕。また，鏡工の離脱によって經營規模の縮小した「青蓋」は，新たに「陳氏」との合作を進めた。圖3左は長沙市絲茅沖8區15號墓から出土した浮彫式獸帶鏡〔周世榮1986：122〕，圖3右は長沙市南郊公園4號墓から出土した盤龍鏡（長沙

95) で、ともに「青蓋陳氏作四夷服」ではじまる樋口分類の銘文 N があった。漢鏡 5 期における「陳氏」の作例には集釋 509・510 と集釋 512 注にあげた浮彫式獸帶鏡があり、「陳氏」は「張氏」に近い関係にあった淮派の鏡工であった。その盤龍鏡の圖像をみると、副紋が省略され、主紋の龍虎表現も簡略化しているものの、以上にみた「青蓋」鏡の特徴をそのまま保持し、龍形の辟邪・天祿が對峙する「陳氏」盤龍鏡（小校 15-42）の形跡はみじんも認められない。その合作は「青蓋」の主導によって推進されたのであろう。

2. 吳派の成立と展開

後漢から三國代にかけて、江南の吳縣は鏡生産の中心地のひとつであった〔王仲殊 1985〕。いまの江蘇省蘇州市に所在した吳縣は、もともと會稽郡に屬していたが、順帝の永建四年（129）に郡の北半部を分割して吳郡が設置され、その郡治となった。

淮派の鏡工が相ついで自立した漢鏡 5 期末に、會稽郡の吳縣に出自をもつ「朱師」や「柏師」ら吳派が畫像鏡を創出し、漢鏡 6 期の淮派に強い影響を與えたことは、すでに論じたとおりである〔岡村 2010〕。それをふまえ、ここでは吳派の成立と展開、および吳派と淮派との関係を検討する。

(1) 「吳朱師」鏡

圖 4 左の「建初八年（83）吳朱師作」銘をもつ畫像鏡（浦上 129）が発見されたことによって、畫像鏡の出現は従來の想定より 20 年ほどさかのぼることになった〔岡村 2010〕。漢鏡 5 期末の 80 年代に吳縣に出自する「吳朱師」が鏡工房を開設し、西王母・東王公と青龍・白虎の圖像をもつ畫像鏡を創作したのである。その紀年銘は西王母の後ろに記され、ほかに「西王母」・「東王公」・「玉女侍公」の榜題がある。兩性を具有した西王母が分裂し、陰陽を調える西王母・東王公と四方を守る青龍・白虎とで構成される二神二獸の畫像鏡が成立したのである〔岡村 1988〕。西王母は玉勝の附屬した巾をかぶり、東王公は通天冠をかぶっている。東王公の前には玉女が座し、後ろには仙人が宙返りしている。西王母の前には侍女 2 人が立つ。主紋を區畫する乳は連珠紋、外區は流雲紋で、鈕座の紋様帯と内區外周の銘帯がなく、外區の流雲紋の内側に鋸齒紋はない。

圖 4 右は同じ「朱師」の制作した淺野榎吉舊藏鏡（紹興 6）で、「玉女、朱師作兮」・「玉女侍」・「西王母」・「仙人六博」・「東王公」という榜題とその圖像がある。ここでは青龍・白虎ではなく「玉女」と「仙人六博」の圖像が對置され、西王母・東王公とともに神仙だけで構成される世界をあらわしている。西王母は「建初八年」鏡と同じように玉勝の附屬した巾をかぶるが、本鏡の東王公は三山冠となっている。玉女は屏風のなかに大き



圖4 「吳朱師」畫像鏡 左：浦上蒼穹堂藏鏡，右：淺野襟吉舊藏鏡（紹興6）

くあらわされ、前には侍女と仙人が侍し、鈕の反対側には六博に興じる一對の仙人と寄り集う2體の仙人があらわされている。西王母の前に座る侍女には「玉女侍」の榜題があり、その下では仙人が宙返し、東王公の左右にも仙人が侍従している。外區は鋸齒紋と複線波紋帯からなり、「建初八年」鏡より後出するのであろう。

また、王趁意氏の所藏する「朱師」畫像鏡〔王趁意2011:100〕は、「建初八年」鏡に類似する流雲紋の外區、連珠紋の乳、半圓を連ねた鈕座をもち、内區の圖像は西王母・東王公と玉女・仙人だけで構成されている。仙人の騎馬列の前に「朱師作」とあるほか、「西王母」・「玉女兮」・「東王公」という榜題を配している。しかし、圖像の體つきはいずれも豊満で、顔が身體に比べて大きくあらわされており、細身に表現された前2鏡と大きく異なっている。しかも、兩袖を振り回して舞う玉女や歌舞を楽しむ仙人たちの表現は、淮派の畫像鏡に近い特徴をもっている。

淮派の鏡はほとんどが銘文帯をもち、そこに獨特の長い銘文をいれることが多いのに対して、「朱師」畫像鏡の3面は圖像の横に短い榜題をいれるだけである。しかし、漢鏡6期に下ると、「朱氏」盤龍鏡が出現し、槌口分類の銘文Nをもつようになる。それには廣西壯族自治區梧州市河西松山（廣西88）や湖北省鄂州市鄂鋼544工地100號墓（鄂州76）の出土例があり、廣西例は6句、鄂州例は4句の銘文Nがある。重要なことは、「朱氏」盤龍鏡は「青蓋」のそれと銘文Nが共通するだけでなく、それに近似する龍と虎の圖像をもっていることである。詳細は次節において検討するが、これは畫像鏡を創作した「朱師（氏）」が漢鏡6期に「青蓋」盤龍鏡の圖像紋様と銘文をほとんどそのまま受容したことを意味し、淮派と吳派の密接な交流をものがたる。

なお、中國の「盛世收藏」サイトにおいて2012年1月のオークションに「胡陽里」

「朱師作」の榜題をもつ盤龍鏡が発表された。それは龍が1頭だけの主紋で、銘帯がなく、外區に唐草紋をめぐらせた、漢鏡5期末にさかのぼる型式である。これが確かであれば、「建初八年」鏡に前後して吳縣の「胡陽里」に出自する「朱師」が独自の盤龍鏡を制作していた可能性があるが、現物を確かめていないため、備考として記すにとどめたい。

(2) 「吳向里栢師（栢氏）」鏡

「朱師（氏）」とほぼ同じころに吳縣で活動をしていたのが「吳向里栢師（氏）」である。その最初の作品が圖5-1の浙江省紹興市漓渚出土「栢師」浮彫式獸帶鏡（浙江24／浙江修訂20）で、四葉紋乳で7區に分けた内區に「栢師作」や「王喬馬」・「赤誦馬」・「銅柱」・「辟耶」の榜題とその圖像を配している。馬草を食べる「赤誦馬」・「王喬馬」の區畫のあいだに六博を樂しむ一對の仙人があり、それが王子喬と赤松子にあたる。鈕座の圓乳のあいだに「富貴長壽，宜子孫，大吉」の9字をいれ、外區には四神のほか魚や三足鳥などを加えた獸紋をめぐらせている。圖像表現は獨特で、榜題をいれることも吳派の特徴であるが、仙人と瑞獸を主とする紋様構成は淮派の影響を強く受けている。漢鏡5期末のおよそ80年代の制作であろう。これに類似する浮彫式獸帶鏡が湖北省鄂州市にあり（鄂州272）、内區の圖像に「仙人止博」・「銅柱」・「仙馬」・「辟耶」・「辟耶」・「熊」・「白虎」・「白鹿」の榜題と鈕座に「君宜車馬，夫人宜子孫」の9字がある。作鏡者名は記されていないが、おそらく「栢師」の作品であろう。

このような浮彫式獸帶鏡につづいて「栢氏」が着手したのが畫像鏡の制作である。圖5-2は王綱懷氏藏の「吳向里栢氏」畫像鏡で、内區には「西王母」・「東王公」の榜題とその圖像、および5頭だての馬車が2區畫にあらわされている。西王母は玉勝をつけず、東王公は通天冠をかぶっている。西王母と東王公の左右にはそれぞれ侍女や舞姫ら8人があり、鈕と乳の周圍には連珠紋、外區には鋸齒紋と複線波紋をほどこしている。その銘文は樋口分類の銘文Nで、「：」記號につづいて、

吳向里栢氏作竟四夷服。多賀國家人民息。胡虜殄威天下復。風雨時節五穀孰。長保二親得天力。傳告后世樂無亟兮。

とある。「向里」は吳縣内の行政區畫で、「栢氏」の出自したところ。おそらく「吳朱師」の近くで作鏡活動をしていたのだろう。

「栢氏」は「栢氏」ともあらし、「吳向里栢氏作」の畫像鏡が3面ある。圖5-3は浙江省紹興の出土と傳える鏡（上海51）で、内區に「吳王」・「忠臣伍子胥」・「王女二人」・「越王」・「范蠡」の榜題とその圖像がある。故事の主題は「忠臣伍子胥」であり、『史記』伍子胥傳にあるように、「越王」と「范蠡」の謀略によって「伍子胥」が「吳王」から遠ざけられ、最後に「吳王」から賜った屬鏤の劍を手に見開いて自刎するさまを繪卷

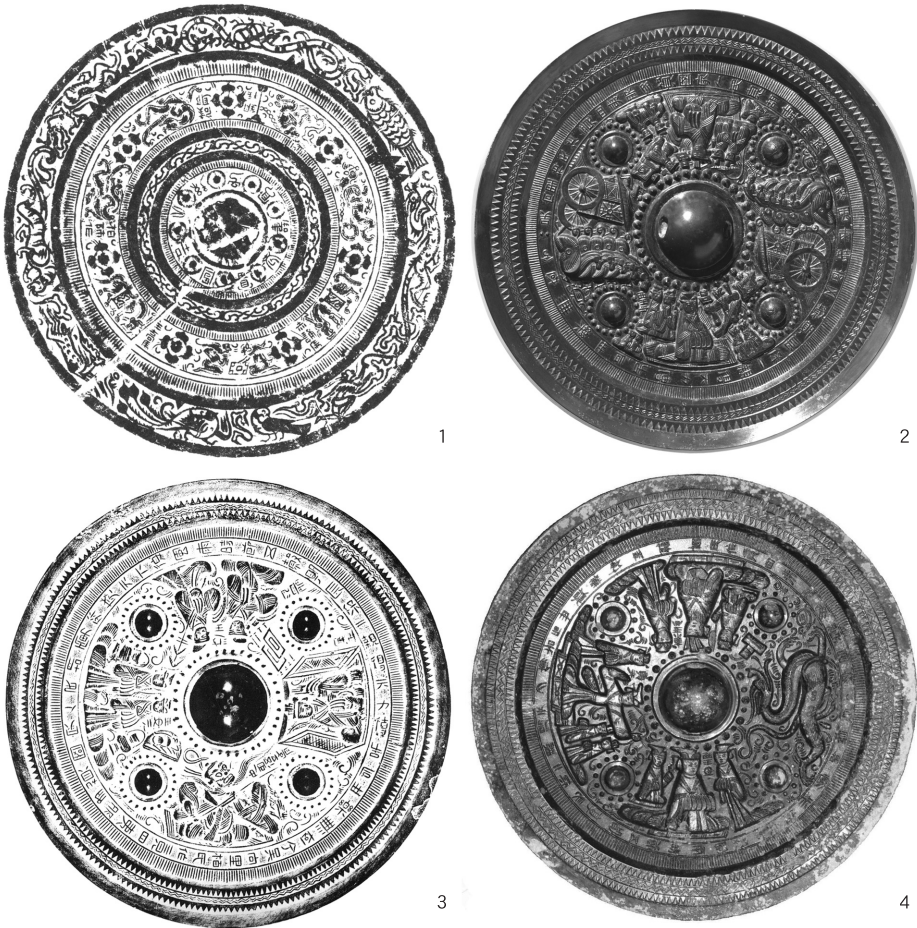


圖5 「吳向里柏師(氏)」の獸帶鏡と畫像鏡 1: 浙江省紹興市漓渚出土「柏師」浮彫式獸帶鏡(浙江24/浙江修訂20), 2: 王綱懷氏藏「吳向里柏氏」畫像鏡, 3: 傳浙江省紹興出土「吳向里栢氏」畫像鏡(上海51), 4: 孔震氏藏「栢氏」畫像鏡(王牧氏提供)

ふうに表示している。鈕座・乳・外區の紋様は圖5-2「吳向里栢氏」鏡と同じで、銘文もほとんど同一である。また、山口讓四郎舊藏の鏡(紹興49)は、鈕をはさんで「吳王」・「力士」と「忠臣伍子胥」の榜題をもつ圖像があり、のこる2區畫には5頭だての馬車が疾走している。鈕と乳は連珠紋をもたないが、「忠臣伍子胥」の圖像と外區紋様と銘文は圖5-3鏡とほぼ同じである。「吳王」は劍を振りかざして「力士」と闘っているが、その故事はわからない。中國國家博物館藏の鏡〔楊桂榮1993・圖113〕もほぼ同じ銘文をもつが、内區には馬上から矛や弓矢で龍や虎と闘う2人の騎兵、4頭だての馬車、「東王公」・「西王母」の榜題とその圖像がある。

これにたいして圖5-4は孔震氏藏「栢氏」畫像鏡で、圖5-3鏡と同じように連珠紋の鈕座と乳、鋸齒紋の外區、樋口分類の銘文Nをもち、内區には「西王母」・「東王公」の

榜題とその圖像を對置し、のこる2區畫には「貞夫」の榜題と弓を射る女性の圖像、および龍を配している。西王母と東王公の圖像表現は、中國國家博物館の「吳向里栢氏」鏡に近似し、同じ「栢氏」の制作であることがうかがえるが、この「貞夫」圖像は西王母・東王公の神仙世界とは直接かかわりのない韓朋故事に由來する。すなわち、それは唐の敦煌文書「韓朋賦」などに傳承された故事で、韓朋の妻「貞夫」が血書を矢の先に結び、宋王に囚われた韓朋に向かって射る場面を表現している〔王牧2006〕。韓朋故事は次節にみる「周是」畫像鏡にもあらわされているが、神仙世界にそれを組みこんだこととあわせて、「栢氏」の創意があらわれている。

以上の「栢（柏）氏」畫像鏡は、すべて鋸齒紋の外區と樋口分類の銘文Nを用いているが、主紋の題材には「忠臣伍子胥」の故事のほか、韓朋「貞夫」故事、二神二獸や車馬など、多様性を求めたのである。

圖6には孔震氏藏の盤龍鏡2面を示した。どちらも樋口分類の銘文Nをもち、圖6の左は「栢師作」で、右は「吳向里栢氏作」である。龍と虎が對峙する主紋をみると、龍は2角をもち、角の先端が少し彎曲すること、頭は斜め上からみた形で、龍の額がハート形を呈し、アーモンド形の兩眼が突起すること、首から丸い背中にかけて鱗があり、その下から「し」字形に曲がった足が伸びること、一方の虎は丸い頭を斜め横からみた形で、口を大きく開き、丸く突起する兩眼をもっていること、首には2本線で縞模様をあらわし、胴部と鈕座とのあいだから足がまっすぐ伸びていること、などの特徴があり、前章にみた青蓋系の龍虎紋と完全に一致する。しかし、圖6左の外區は獨特の雲氣紋であるのたいして、圖6右のそれは「青蓋」鏡と同じ鋸齒紋で、断面はやや斜縁化している。また、圖示していないが、浙江省紹興縣から出土した「吳向里栢師」盤龍鏡（浙江97／浙江修訂93）は、青蓋系の龍虎紋、樋口分類の銘文N、外區の鋸齒紋が圖6右の鏡とほぼ同じである。したがって、この3面の盤龍鏡は「栢師（栢氏）」による一連の作品であり、作鏡者名は「栢師」→「吳向里栢師」→「吳向里栢氏」と變化したと考えられる。

この3段階をもとに「栢師（栢氏）」の作品を整理すると、第1段階に「栢師」は浮彫式獸帶鏡と盤龍鏡を創作し、第2段階に「吳向里栢師」の盤龍鏡、第3段階に「吳向里栢（栢）氏」または「栢氏」の畫像鏡と盤龍鏡を制作したのであろう。外區の鋸齒紋は第2段階にはじまり、第3段階にはすべての畫像鏡と盤龍鏡に用いられた。ところが、前節にみた「朱師（氏）」のばあい、「朱師」の段階に畫像鏡を創作し、「朱氏」の段階には盤龍鏡を制作している。かりに兩者の段階が並行するのなら、80年代の第1段階に「朱師」の創作した畫像鏡を手本にして第3段階に「栢（栢）氏」が各種の畫像鏡を制作し、反対に「朱氏」は「栢師」盤龍鏡を手本に盤龍鏡を模作したのであろう。



圖6 孔震氏藏「吳向里柏師（氏）」盤龍鏡 左：「柏師」鏡，右：「吳向里柏氏」鏡

(3) 「吳何陽周是（氏）」鏡

杭州市餘杭區蠟燭庵墓から出土した「周是」畫像鏡（浙江修訂11）は、樋口分類の銘文N，連珠紋の鈕座と乳をもち，流雲紋の外區は平縁である。「是」は「氏」の假借で，「周氏」は初期の段階にしばしば「周是」と表記している。内區には，弓で矢を射る女性に「貞夫」，冠をかぶって立つ男に「宋王」，その横に立つ2人の従者に「侍郎二人」，刀と劍をあげて闘う2人の男に「力士」の榜題があり，ほかに樓閣と馬と馬飼いの圖像がある。この主題は敦煌文書の「韓朋賦」にみる韓朋の妻「貞夫」の故事であるが〔王牧2006〕，闘う2人の場面はこの説話とは無関係に挿入されたものであろう。

圖7には二神と車馬の圖像をもつ「周是（氏）」畫像鏡を示した。4面すべて樋口分類の銘文Nで，いずれも西王母は玉勝のない巾，東王公は通天冠をかぶっている。圖7-1は上海・漢雅堂藏の「周是」鏡で，外區に九尾狐や雙魚など各種の獸紋をめぐらせている。その馬車の表現は圖5-2「吳向里柏氏」畫像鏡に近いが，二神の左右に同形の仙人を配しているところが異なっている。圖7-2は浙江省紹興縣上竈出土の「吳何陽周是」鏡（浙江修訂：彩版12）で，「何陽」は吳縣の里名であろう。鈕と乳に連珠紋がなく，外區は鋸齒紋となっている。周縁の断面形は蠟燭庵墓の「周是」畫像鏡に近い。西王母の左肩から氣が立ちのぼり，東王公は左手を顔の横に舉げているのが特徴的である。二神の左右に玉女らの侍従，馬車の前後に仙人があり，馬は2頭だけ後ろを振り向いている。圖7-3の「周氏」畫像鏡〔程長新ほか1989：圖版29〕は，二神の左右に玉女らの侍従がある點は圖7-2鏡に近いが，外區的獸紋，鈕と乳の連珠紋は圖7-1鏡にならっている。新しい特徴としては，馬車の前に雲氣の山塊があること，外區的獸紋は7體すべて尻尾が同じような唐草状になって圖7-1鏡より形式化が進み，周縁が斜縁化していることである。

圖7-4は紹興越國文化博物館蔵の「周氏」畫像鏡で、外區の獸紋、鈕と乳の連珠紋は圖7-3鏡に類似するが、西王母の左肩から氣が立ちのぼり、右手を高く舉げた東王公の特徴は圖7-2鏡に近い。また、馬車と對になるのは2列に並んだ馬で、その前後と馬車の前には圖7-3鏡にみた雲氣の山塊があらわされている。

以上5面の「周是(氏)」畫像鏡は、おそらく同一工房において制作されたもので、周縁の斜縁化からみれば、「周是」鏡が「周氏」鏡より先行したと考えられる。このほか、巖窟2下31には「吳胡傷里周仲作」、出光美術館には「吳胡里仲作」の畫像鏡があり、いずれも樋口分類の銘文Nをもち、二神と車馬の表現、とくに西王母の兩肩から氣が立ちのぼっている表現が「周是(氏)」鏡と類似している。「吳何陽」の「陽」と「吳胡傷」の「傷」とは通じるが、王力の上古音説によれば、「何」は「匣歌」,「胡」は「匣魚」で韻母がわずかに異なっている〔郭錫良1986〕。このため「胡傷」は「何陽」の假借とは断定できないが、その作鏡者「吳胡傷里周仲」が「周是(氏)」と近い関係にあったことは確かであろう。そして、いずれも「周是」の段階では「貞夫」故事など多様な主題を選んでしたが、まもなく二神と車馬に収斂していったのであろう。

浦上蒼穹堂蔵の「周是」畫像鏡は、二神二獸の主紋をもち、左肩から氣の立ちのぼる西王母や左手を顔の横に舉げている東王公の表現は圖7-2「吳何陽周是」鏡とほぼ同じだが、その銘文は特異である。すなわち、

周是作竟眞大工。上有賢士辟不羊。巧工刻之誠文章。和以鉛錫清且明。買此竟□富傷。

とあり、樋口分類の銘文Nを常用する吳派の鏡では例のない語句を用いている。ただし、唯一の類例として、つぎの巖窟2上83「尙方」内向連弧鏡の銘文(集釋706)がある。

尙方作竟眞大工。上有仙人辟不羊。巧師刻成文章。和周鉛錫清且明。買氏竟者□富昌。□□□王□孫子。三公□□□□□。傳付子孫樂未英。日飲酒月作倡。

この上5句は、浦上蒼穹堂蔵「周是」畫像鏡の銘文を借用し、作鏡者の「周是」を「尙方」に、第2句の「賢士」を「仙人」に、第3句の「巧工」を「巧師」に、第4句の「鉛錫」を「鉛錫」に、第5句の「此」を「是」の假借である「氏」に改めているだけである。これによって「周是(氏)」は「尙方」と近い関係にあったこと、「賢士」は「仙人」や「賢聖」(集釋728)と同義で、圖像の東王公・西王母を意味することがわかる。また、「鉛(鉛)錫」は集釋439の「和以銀錫清且明」の「銀錫」を改めたものだが、鏡の原料として鉛が銘記された希有の例として注意する必要がある。

「周是(氏)」はまた、「朱師(氏)」や「栢師(栢氏)」と同じように盤龍鏡も制作している。北朝鮮ピョンヤン市將進里30號墓の「周氏」盤龍鏡(梅原考古資料209)は、例のごとく、青蓋系の龍虎紋、樋口分類の銘文N、鋸齒紋の外區をもっている。ただし、王牧



圖7 「吳何陽周是(氏)」畫像鏡 1:上海·漢雅堂藏「周是」鏡(黃洪彬氏提供), 2:浙江省紹興縣上窰出土「吳何陽周是」鏡(王牧氏提供), 3:「周氏」鏡〔程長新ほか1989:圖版29〕, 4:紹興越國文化博物館藏「周氏」鏡

氏の教示によれば、2011年の中國徐州漢鏡學術研討會において展示された「周是」盤龍鏡は、内區の主紋はふつうの青蓋系の龍虎紋だが、

周是作竟眞大工。上有窮奇辟不羊。服之竟者日飲酒月作倡。傳告后世俱毋忘。
という銘文がある。「窮奇」は集釋 602 にもみえる天神の名。この上 2 句は浦上蒼穹堂藏の「周是」畫像鏡と共通し、第 3 句の「日飲酒月作倡」は「尙方」鏡の集釋 706 にもみえる。吳派のなかでも「周是」は淮派に近い立ち位置にあったことがうかがえる。

以上のように吳派の鏡工たちは、いずれも畫像鏡と盤龍鏡を同時期に並行して制作していた。その畫像鏡と盤龍鏡とは、同じ作者名が記されているが、外區の鋸齒紋と樋口分類の銘文 N をのぞけば、相互にあまり共通性が認められないが、おそらく大型鏡と小型鏡、高價な鏡と安價な鏡、というような使い分けがあったのであろう。

3. 漢鏡 6 期における吳派と淮派の交流

吳派の創出した畫像鏡は、浮彫式獸帶鏡や盤龍鏡を制作していた淮派の鏡工たちに大きな衝撃を與えた。西暦 80 年代になると、淮派の「杜氏」らは四神を中心とする世界を棄てて西域に由來する奇獸の世界に轉換しようとしていたが、吳派の畫像鏡とそこにあらわされた神仙世界は想定外の新鮮さがあったのだろう。さきの論文〔岡村 2010〕では「杜氏」・「呂氏」・「龍氏」・「池氏」らがそれぞれ獨自に畫像鏡の手法をこぞって受容したことを論じ、淮派をリードした「杜氏」の動向については別に專論を用意した〔岡村 2013〕。ここでは「永元三年 (91)」畫像鏡をはじめとする淮派の「石氏」鏡をとりあげ、吳派と淮派の交流を検討するとともに、漢鏡 5 期と漢鏡 6 期の編年を明らかにする。

(1) 「石氏」畫像鏡の出現と展開

「建初八年 (83) 吳朱師」畫像鏡より後れること 8 年、淮派の「石氏」は「永元三年 (91) 作」の畫像鏡を制作した。圖 8 には 4 面の「石氏」畫像鏡を示した。孔震氏藏の圖 8-1 「永元三年」鏡は、直徑 24.5cm と大型で、内區を 4 區畫に分け、西王母の區畫に「永元三年作」・「西王母」・「仙人」・「玉女」、東王公の區畫に「王公」・「仙人」・「玉女」、歌舞する女性に「雲中玉昌」、目と口を大きく開けた白虎に「白帟」の榜題がある。圖像に榜題をいれる手法は吳派にならっているが、内區外周の銘文 (集釋 605) は、

石氏作竟世少有。	石氏 鏡を作るに、世に有ること少なし。
東王公西王母。	東王公・西王母あり。
人有三仙侍左右。	人に三仙有り、左右に侍す。
後常侍名玉女。	後ろに常に侍す、名は玉女。



圖 8 「石氏」畫像鏡 1：孔震氏藏「永元三年」鏡，2：浙江省奉化市蕭王廟後竺村出土鏡（王牧氏提供），3：浙江省諸暨縣董公村出土鏡，4：孔震氏藏鏡

雲中玉昌踊於鼓。 雲中玉媚，鼓に踊る。
 白帟喜怒毋央咎。 白虎は喜怒し，殃咎母からん。
 男爲公侯女□□。 男は公侯と爲り，女は王婦ならん。
 千秋萬歲生長久。 千秋萬歲，生は長久ならん。

とある。樋口分類の銘文 N ではなく、第 1 句の「世少有」や第 7・第 8 句など淮派に特有の語句を用いている。第 2 句から第 6 句までは内區圖像の説明で、「東王公・西王母」それぞれの前に 3 人の「仙人」が跪き、後ろに「玉女」が立っている。「東王公・西王母」は両肩から氣が大きく立ちのぼり、「東王公」は三山冠をかぶっている。「雲中玉昌」の「玉昌」は舞姫の「玉媚」であり、鼓にあわせて踊っている。「央咎」は「殃咎」で、「白帟」は「喜怒」して威嚇するさまである。鈕座には漢鏡 5 期に淮派が創作した有節重弧紋があり、乳は圓座である。外區には 5 體の獸がめぐり、それぞれ種類が異なっているが、すべて尻尾が同じような唐草状となり、周縁がわずかに斜縁化している。

圖 8-2 以下の 3 面は、すべて内區圖像に二神と車馬、鈕座と乳に連珠紋、外區に獸紋、樋口分類の銘文 N をもつ「石氏」畫像鏡である。すべて西王母は玉勝のない巾、東王公は三山冠をかぶっている。浙江省奉化市蕭王廟後竺村の後漢墓から出土した圖 8-2 鏡（浙江修訂：彩版 14）は、圖像の榜題は「東王公」のみで、二神の兩側に形式化した仙人が跪き、西王母の兩肩からは氣が立ちのぼっている。5 頭だての馬車と對になるのは、5 頭の馬列にしたがう仙人 5 人で、それぞれの前には雲氣の山塊がある。圖 8-3 は浙江省諸暨縣董公村出土鏡（浙江修訂：彩版 13）で、西王母と東王公の左右には侍女と仙人が奉仕している。西王母の左肩には小さく氣が立ちのぼっている。ほかの 2 區畫には 4 頭だての馬車があり、それぞれの馬列の前には圖 8-2 鏡と同じ雲氣の山塊がある。孔震氏藏の圖 8-4 鏡は、西王母と東王公の左右に侍従と仙人があり、西王母の兩肩からは氣が立ちのぼっている。ほかに 5 頭だての馬車と 6 頭の馬列がある。馬車の前と馬列の後ろには雲氣の山塊があり、馬列の上には 3 人が竝んでいる。この圖像構成は圖 8-2 鏡に類似する。

以上 4 面の「石氏」畫像鏡を相互に比べてみると、内區的圖像構成をはじめ、鈕座と乳の連珠紋や銘文において、圖 8-1 鏡とそのほかの 3 面との懸隔が看取できる。上野祥史〔2001〕の分類にしたがえば、4 面すべて圖像表現が寫實式で、鈕座に有節重弧紋をもつ圖 8-1 鏡は圓圈 I 式、そのほかの 3 面は廣畫面 II 式に分類され、その圓圈式は華北東部の袁氏系、廣畫面 II 式は吳郡系に屬し、上野の想定する制作地は 2 地域に分かれてしまう。しかし、外區的獸紋は 4 面とも尻尾が唐草状を呈し、西王母と東王公の圖像表現、とりわけ圖 8 中央の擴大寫真から明らかなように、西王母の肩から氣が立ちのぼっている特徴がまったく一致している。したがって、「石氏」の制作した以上の 4 面は、圖 8-1 「永元三年」鏡を出発点として同じ工房で連作されたものと考えられる。

前章でとりあげた呉派のなかで、「石氏」鏡にもっとも近い畫像鏡を制作したのが「周是(氏)」である。畫像鏡を創作した「朱師」や「栢師(柏氏)」らは、西王母の肩に氣を表現することがほとんどなかったが、圖7に示したように、「周氏」鏡にはその表現が認められる。「石氏」鏡の東王公は三山冠をかぶるのに、「周氏」鏡ではすべて通天冠となっているところにちがいがあがるが、西王母と東王公の圖像表現は類似している。また、西王母と東王公の左右に形式化した仙人を配すること、馬車や馬列の前後に雲氣の山塊をあらわすこと、尻尾が唐草状になった獸紋を外區にめぐらすことなども、「石氏」鏡と「周氏」鏡とに共通して認められる特徴である。したがって、「永元三年」鏡を制作した段階から淮派の「石氏」は呉派の「周氏」と密接に交流していたと考えられる。

(2) 「石氏」盤龍鏡の展開

圖9には「石氏」盤龍鏡6面の内區主紋を比較した。いずれも龍と虎が對峙しているが、その圖像表現には變化が認められる。まず、漢鏡5期にさかのぼる圖9-1は浙江省上虞縣の出土鏡(浙江修訂:彩版56)で、その銘文(集釋521)は、

石氏作竟世少有。	石氏鏡を作るに、世に有ること少なし。
倉龍在左、白虎居右。	蒼龍は左に在り、白虎は右に居る。
仙人子僑、以象於後。	仙人の子僑あり、像は後ろに象る。 ^{かたど}
爲吏高升賈萬倍。	吏と爲れば高升し、賈は萬倍ならん。
辟去不詳利孫子。	不祥を辟去し、孫と子に ^{よろ} 利し。
千秋萬歲生長久。	千秋萬歲も生は長久ならん。

とある。第1句と末句は圖8-1永元三年「石氏」畫像鏡の銘文と同一で、第2・第3聯は内區の圖像を説明している。すなわち、向かって左の「倉龍」と右の「白虎」とが口を大きく開けて對峙し、その足元で長い豎笛を吹いているのが「仙人子僑」、すなわち仙人の王子僑である。この龍は角の基部に3枚の羽根状隆起をもち、足の指が三叉に分かれて肉球状の突起がつき、虎の目が半圓形を呈する點で、「青蓋」や呉派の盤龍鏡とは表現が異なっている。

これに類似する龍虎表現の盤龍鏡をみると、圖10左は廣西壯族自治區貴港市深釘嶺32號墓の「尙方」鏡[廣西壯族自治區文物工作隊ほか2006]で、その銘文(集釋522)に、

尙方作竟世少有。倉龍在左、白虎居右。爲吏高升賈萬倍。胡虜殄滅去萬里。辟去不羊利孫子。長保二親樂無已。□媯萬人兮。

とあり、圖9-1「石氏」鏡と同一の語句が多い。しかも、外區には5種の獸がめぐり、その尻尾が唐草状になっている特徴は、圖8-1永元三年「石氏」畫像鏡と類似している。また、圖10右は安徽省壽州市黃安村から出土した「淮南龍氏」鏡(六安135)で、銘文の

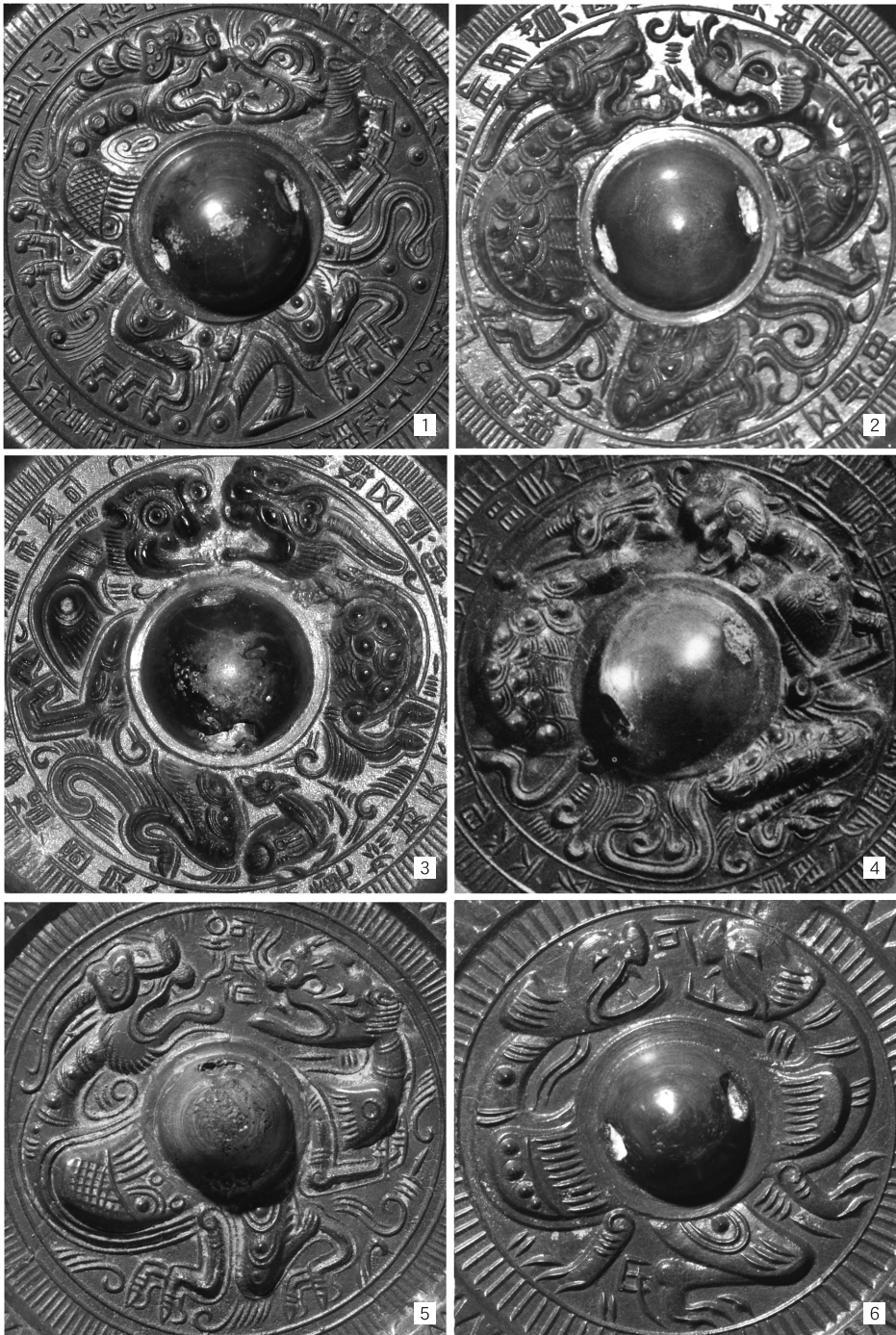


圖9 「石氏」盤龍鏡の主紋 1：浙江省上虞縣出土鏡，2・3：紹興越國文化博物館藏鏡，4：浙江省博物館藏鏡（浙江修訂91），5：浙江省紹興縣湖塘鎮古城村出土鏡，6：浦上蒼穹堂藏鏡



圖10 淮派の盤龍鏡 左：廣西壯族自治區貴港市深釘嶺32號墓出土「尙方」鏡〔廣西壯族自治區文物工作隊ほか2006〕，右：安徽省壽州市黃安村出土「章和（87-88）」年間「淮南龍氏」鏡（六安135）

冒頭に「隆帝章和時」とあり，章帝の章和（87-88）年間の制作である。このことからみると，圖9-1「石氏」鏡は80年代後半に「尙方」や「淮南龍氏」と近い関係のなかで制作されたと考えられる。

これに後続するのが圖9-2鏡と圖9-3鏡で，いずれも紹興越國文化博物館の所蔵である。圖9-2鏡は龍の角に羽根状隆起があり，虎の頭・目・口の表現も圖9-1鏡をそのまま継承している。しかし，仙人の圖像が脱落し，龍の額・肩・足の表現，樋口分類の銘文Nは吳派の盤龍鏡と同じである。圖9-1鏡にみた淮派の特徴が薄れ，吳派の特徴が少しずつあらわれるようになったのである。それが圖9-3鏡や浙江省博物館蔵の圖9-4鏡（浙江修訂91）では，龍や虎は完全に吳派の表現に置き換わっている。

圖9-5は浙江省紹興縣湖塘鎮古城村の出土鏡〔紹興縣文物保護管理所2002〕で，銘帯をもたないが，龍と虎のあいだに「石氏作」と記されている。主紋のなかに銘文をいれる手法は，畫像鏡の榜題をまねたのであろう。主紋の表現は簡略化しているものの，龍の額が雲形を呈し，豊かな顎鬚をもち，肩に斜格子をいれ，虎の目が半圓形になっている特徴は，圖9-3鏡や圖9-4鏡よりも圖9-1鏡に類似し，淮派の特徴をとどめた別系統の表現と考えられる。また，浦上蒼穹堂蔵の圖9-6鏡は，鈕の上下に「石」「氏」の2字が記され，その字形は圖9-5鏡に近い。しかし，主紋の龍虎は表現が特異で，いっそう簡略化している。外區の鋸齒紋をみると，圖9-3鏡までの外區は三重の紋様帯をもつが，圖9-4鏡と圖9-5鏡では中間の複線波紋帯が省略されて二重の鋸齒紋帯となり，浦上蒼穹堂蔵の圖9-6鏡では單圈の鋸齒紋帯になっている。この省略化にともなって圖9-4鏡の断面が斜縁化し，圖9-6鏡では三角形に尖っている。

盤龍鏡にかんする上野祥史〔2003〕の分類にしたがえば，龍の表現と配置によって圖

9-1 鏡と圖 9-2 鏡は型式 1B の龍氏系、圖 9-3 鏡は型式 3BR の西方青蓋系、圖 9-4 鏡と圖 9-5 鏡は型式 3BL の東方青蓋系に屬し、圖 9-6 は型式不明である。そのうち龍氏系は長江中流域と華北東部から出土し、西方青蓋系は四川、東方青蓋系は江南というように、同じ「石氏」盤龍鏡でも上野の想定する制作地は 3 ないし 4 地域に分かれてしまう。上野が盤龍鏡の型式 1B を龍氏系とし、型式 3B を青蓋系としたのは、その命名と分類基準はともかくとして、妥当な判断であろう。しかし、龍と虎が對峙する型式 3B について、龍が右にあるのを型式 3BR、左にあるのを型式 3BL と二分し、あいまいな分布論をもとに中國の東西に制作地が分かれていると考えたのはまちがっている。「石氏」畫像鏡にみたように、淮派と吳派とは地域をこえた交流があり、そのなかで「石氏」は上野のいう龍氏系から青蓋系へと龍紋を變化させていったのであろう。

要するに、「石氏」が盤龍鏡の制作に着手したのは 80 年代のことで、その圖 9-1 鏡は「尙方」や「淮南龍氏」らに近い作風をもっていた。「石氏」をふくめ、この段階における淮派の鏡には、吳派の影響はほとんどおよんでいない。しかし、まもなく吳派の創作した畫像鏡の情報が淮派に傳わり、「石氏」は大きな衝撃をうける。永元三年(91)「石氏」畫像鏡はその初期の作例で、吳派の畫像鏡に淮派獨特の銘文や外區紋様などを加味したものである。やがて「石氏」は吳派の「周是(氏)」畫像鏡をほとんどそのまま模倣するようになり、「石氏」の盤龍鏡も折衷様式の圖 9-2 鏡をへて圖 9-3・圖 9-4 鏡のような吳派の模倣に墮ちていったのであろう。ただし、圖 9-5 鏡のような初期の作風を残した盤龍鏡も制作しているから、「石氏」は淮派と吳派のあいだで搖れ動いていたらしい。

以上 4 面の「石氏」畫像鏡のうち 2 面と盤龍鏡の 6 面とは、すべて紹興周邊の出土と傳えられている。このことからみれば、「石氏」工房は紹興の周邊に所在したか、あるいは淮河流域から離れて紹興に工房を構えたと考えることができるかもしれない。しかし、この段階に紹興周邊で鏡が生産されていたという確かな證據がなく、吳縣で制作された上述の「吳朱師」・「吳向里栢師(栢氏)」・「吳何陽周是(氏)」鏡なども、ほとんどが浙江省内の出土であるということからみれば、紹興周邊は他地域で生産された鏡の一大消費地であった可能性も否定できない。このため、鏡の制作地問題は不問にしておき、當面は淮派と吳派という作鏡系譜の分析を優先することが妥当であろう。

(3) 漢鏡 5 期から漢鏡 6 期にかけての編年

かつて後漢鏡の編年において、方格規矩四神鏡や盤龍鏡などの動物紋鏡群と内行花紋鏡の型式をもとに漢鏡 5 期と漢鏡 6 期とを區分した〔岡村 1993〕。單純化していえば、方格規矩四神鏡は、外區の鋸齒紋が三重から二重に、主紋が四神から鳥や渦紋に簡略化し、内行花紋鏡は、鈕座が四葉紋から蝙蝠紋に、雲雷紋帯が無紋凹帯に變化している。この

ような漢鏡5期から連続的にみた相對編年とともに、陰陽を調える西王母・東王公があらわされた畫像鏡や環狀乳神獸鏡の出現を漢鏡6期の指標とみなし、元興元年(105)環狀乳神獸鏡をもとに、その絶對年代をおよそ100年ごろに設定した。しかし、80~90年代の紀年鏡が相ついで知られるようになり、淮派や吳派の個性的な作鏡活動が明らかになると、漢鏡5期と漢鏡6期の区分について再検討する必要がでてきたのである。

まず、畫像鏡の出現、換言すれば吳派の成立をもって漢鏡6期のはじまりとするならば、「建初八年吳朱師」畫像鏡によって、およそ80年代初頭に設定できるだろう。それは鏡にあらわされた世界觀の轉換を示すことから、文化史上の意義は大きい。しかし、80年代は淮派の最盛期で、独自の作鏡活動を展開していた時期にあたる。「杜氏」や「淮南龍氏」らは、四神を中心とする瑞獸から西域に由來する奇獸へと鏡の世界を轉換させようとし〔岡村2010〕、鏡工の自立によって衰えていた「尙方」が復興しつつあった段階でもある。淮派において時期を区分するような變化はまだ起きていない。

むしろ永元三年(91)「石氏」畫像鏡にみるように、吳派の創作した畫像鏡を淮派が受容し、畫像鏡が大いにひろがった90年代初頭に漢鏡6期のはじまりを設定するのが妥當ではなかろうか。このころから吳派と淮派の交流が活發化し、「石氏」のほか「杜氏」や「淮南龍氏」ら淮派の鏡工たちは競うように畫像鏡を制作していった。吳派のほうでも、二神と車馬をあらわした畫像鏡や青蓋系の龍虎紋をもつ盤龍鏡など、定型化した鏡が多くなる。また、遅くとも105年には「廣漢西蜀」工房を中心とする廣漢派が環狀乳神獸鏡・八鳳鏡・獸首鏡の生産をはじめ。神仙世界を浮彫であらわした神獸鏡の出現は吳派と淮派の廣範な作鏡活動と連動し、平面的な紋様表現の八鳳鏡や獸首鏡は、次章にみるように、中原地區の内行花紋鏡と關連していた可能性が高い。したがって、このような90年代にはじまる汎中國的な變化を漢鏡6期の畫期とみるのが妥當であろう。

4. 江南における神獸鏡と八鳳鏡の出現

2世紀後半の漢鏡7期は、華西系・江南系・徐州系鏡群の分立を畫期とする。華西系では廣漢派の「廣漢西蜀」を中心に神獸鏡・八鳳鏡・獸首鏡が盛行し、後半期には三段式神仙鏡や方銘獸紋鏡が出現する〔森下章司2011〕。江南系と徐州系では漢鏡6期の傳統が漢鏡7期前半まで存續するが、180年代に華西系より神獸鏡や八鳳鏡の情報が傳わると、作鏡活動がふたたび活發になる〔岡村2011〕。本稿でとりあげるのは、そのうち江南系における「吳郡胡陽張氏元公」の神獸鏡と「趙禹」の八鳳鏡とである。

(1) 「吳郡胡陽張氏元公」の神獸鏡

さきに浙江省紹興縣上游公社出土の「吳郡胡陽張氏元公」環狀乳神獸鏡（浙江修訂 50）と湖南省衡陽市道子坪出土の「張氏元公」重列式神獸鏡〔湖南省博物館 1981〕を例示し、「張氏元公」が「吳郡胡陽（里）」で環狀乳神獸鏡を制作したのち、ほかの地域に移って重列式神獸鏡を制作したと推測した〔岡村 2011〕。その後、2011 年にその環狀乳神獸鏡を調査し、新たに數面の「張氏元公」鏡を實見したことによって、吳派の「張氏元公」が新しい種類の神獸鏡を創作していったプロセスがいつそう明確になってきた。

圖 11-1 は藤井康行氏藏の環狀乳神獸鏡で、12 枚の方格には 1 字ずつ「張氏元公。百凍千辟，分別□商。」という銘文をいれている。紹興縣上游公社出土の圖 11-2 環狀乳神獸鏡と同じ「張氏元公」の作品であるだけに、内區の四神四獸像や紋様表現はきわめてよく似ている。鈕座に有節重弧紋，外區に畫紋帶をめぐらす點が異なっているが、ほぼ同時期の作品とみてまちがいないだろう。その畫紋帶は、小山田宏一〔1993〕による雲車の分類では前方部が階段狀に屈曲する A 形式で、時計回りに展開する。

圖 11-2 鏡は半圓方形帶の方格に「吾作明鏡，幽凍三商。長亘子孫。」という 12 字の銘文があり，外區の銘文（集釋 743）は，末句の「長」字を垂下させて渦をなし，「・」の起句記號から時計回りに展開する。

吳郡胡陽，張氏元公。	吳郡胡陽（里）の，張氏の元公は，
制作虛无，自異於衆。	虛無を制作するに，自づから衆と異なる。
造爲明鏡，日月合萌。	明鏡を造爲するに，日月と明を合はさん。
四時永別，□□□王。	四時を永へに別ち，□□□王。
天□和親，富貴番昌。	天□和親し，富貴蕃昌ならん。
百精竝存，其師命長。	百精 竝存し，其の師の命は長からん。

第 5 聯の「富貴番昌」や末句の「其師命長」をのぞけば，「自づから衆と異なる」めずらしい語句が多い。「吳郡胡陽（里）」は，漢鏡 6 期の畫像鏡にみえる「吳胡傷里周仲作」の「吳胡傷里」と同じ場所であったのだろう。「里」字を脱したのは，整った四字句にするためである。漢鏡 5 期より會稽郡吳縣の「胡陽（胡傷里）」には個人經營の作鏡工房が集中し，129 年に吳郡が設置されてからは「吳郡胡陽（里）」の名で通用していたのであろう。しかし，「張氏元公」以前の吳派はもっぱら畫像鏡を制作していたから，同じ場所での作鏡活動とはいえ，「張氏元公」の作風は吳派とはまったく異なっている。それは畫像鏡／神獸鏡という圖像表現だけでなく，銘文においても，「吾作」ではじまる廣漢派の四言句を繼承しつつ，そこに新しい語句を加えたからである。

圖 11-3 は孔震氏藏の「張氏元公」環狀乳神獸鏡である。内區は四神四獸の構成で，神獸像の表現は圖 11-2 鏡と類似する。しかし，獸は肩までの上半身しかないため，環狀乳



圖 11 「吳郡胡陽張氏元公」の神獸鏡 1：藤井康行氏藏「張氏元公」環狀乳神獸鏡，2：浙江省紹興縣上游公社出土「吳郡胡陽張氏元公」環狀乳神獸鏡（王牧氏提供），3：孔震氏藏「張氏元公」環狀乳神獸鏡，4：莊靜芬氏藏「張氏元公」同向式神獸鏡，5：上海・漢雅堂藏「張氏元公」同向式神獸鏡，6：湖北省鄂州市郵電局出土「張氏」重列式神獸鏡（鄂州 244）

は半分の4個だけであり、各神像の左右に配されていた脇侍や龍虎なども省略されている。半圓方形帯の方格には「吾作明鏡，幽涑三商。長保二親。」という12字の銘文があるが、半圓は廣漢派の環狀乳神獸鏡と同じように無紋である。ただし、半圓間の斜面に半圓を並べることは圖11-2鏡と同じである。外區の銘文は、つぎのとおり。

惟此明鏡，幽涑三商。	惟れ此の明鏡は，三商を幽鍊せり。
本出吳郡，張氏元公。	本と吳郡より出でし，張氏の元公は，
百涑，	百たび鍊り，
制作虛无，自異於衆。	虛無を制作するに，自づから衆と異なる。
造爲明鏡，日月合萌。	明鏡を造爲するに，日月と明を合はさん。
四時永別，□□命長。	四時を永へに別ち，□□命は長からん。

末句の「長」字の末端が渦状をなすことは圖11-2鏡と同じで、起句は通例の「吾作明鏡」ではなく、發語の「惟」からはじめている。第2聯の「本出吳郡，張氏元公」は、圖11-2鏡の「吳郡胡陽，張氏元公」を改めた句であり、本鏡を制作したとき「張氏元公」はすでに「吳郡胡陽」から離れていることをいう。本節の冒頭に示した「張氏元公」重列式神獸鏡の「千（遷）出吳郡」もこれと同義である。第3聯はつぎの圖11-4鏡のように「百涑千辟」とするはずであったが、「百涑」の2字を記したところで第1聯に「幽涑三商」という類句があるのに気づき、途中で止めたのであろう。結果として、第4聯以下は圖11-2鏡とほぼ同じ語句を用いている。

圖11-4は臺北・莊靜芬氏藏の「張氏元公」同向式神獸鏡である。内區の主紋は「距(巨)」で3段に區畫し、上段に伯牙・成連先生・鍾子期、中段の左右に東王公・西王母と二獸、下段に黄帝と二獸を配置する。圖像表現は上述の「張氏元公」鏡とほぼ同じである。半圓方形帯の方格には「吾作明鏡，幽涑三商。其師命長。」という12字の銘文があり、その半圓や外周斜面は圖11-1・圖11-2鏡と同じである。ただし、鈕座には有節重弧紋がある。外區の銘文は、珠點の起句記號から時計回りに展開する。

惟此明鏡，煥竝照。	惟れ此の明鏡は， ^{かが} 煥やき竝びに照（明）なり。
本出吳郡，張氏元公。	本と吳郡に出でし，張氏の元公は，
百涑千辟，分別文章。	百たび鍊り千たび ^{のぞ} 辟き，文章を分別せり。
左龍右虎，招福除英。	左龍と右虎は，福を招き殃を除く。
對距相鄉，朱鳥鳳皇。	距に對し相ひ嚮かふは，朱鳥と鳳凰なり。
男則侯，女即侍王。	男は則ち侯（に封ぜられ），女は即ち王に侍さん。
天神集會，祐父宜兄。	天神 集會し，父を ^{たす} 祐け兄に宜し。
久服長飴，位三公。	久しく服し長く ^{やす} 飴んずれば，位 三公（に至らん）。

3句に脱字があるが、めずらしい四言句である。金文京氏の教示によれば、偶數句が平聲

で押韻するだけでなく、奇數句の末字も「疾」のほかは仄聲で整えられており、鏡の銘文としては技巧的な韻文になっているという。起句と第2聯は圖11-3鏡と同じで、作鏡者の「張氏元公」が「吳郡」に出自したことをいう。第1聯の「煥竝照明」と第3聯以下は新たに創作された銘文である。第4・第5聯は圖像にあらわされた左龍・右虎・朱雀・鳳凰をいう。四神のうち玄武が鳳凰に置換していることに注意したい。「距」は圖11-5鏡や三角縁神獸鏡の銘文（集釋・三角縁08）にみえる「巨」に同じで、「維剛」ともいう。本鏡では中段の獸が「距」を口に銜えている。

圖11-5は上海・漢雅堂藏の「張氏元公」同向式神獸鏡である。外區の銘文は末尾に「曾年益壽，其命長。」の2句が加えられているほかは、圖11-4鏡とほとんど同じである。圖11-4鏡と異なる圖像の特徴は、獸の肩に環狀乳が残っていること、獸は4體とも「巨（距）」を銜えていること、下の二獸が銜えた「巨」は鍵形に屈曲し、T字形になった上部に東王公と西王母が坐っていることである。この二神が龍虎や麒麟などの獸座に坐ることも環狀乳神獸鏡の名残である。外區の銘帯と渦紋帯とのあいだに珠紋帯があるのは、圖11-1・圖11-2鏡にみた半圓紋帯を繼承したものであろう。半圓方形帯には半圓間の斜面に細い線で芝草紋をいれ、12枚の方格それぞれに4字の銘文をもつことは、以上の「張氏元公」鏡には例をみない特徴である。その方格銘は、つぎのとおり。

吾作明鏡，幽涑三商。	吾れ明鏡を作るに，三商を幽鍊せり。
配像萬疆。	像を萬疆に配せり。
白牙舉樂，衆神見容。	伯牙 樂を擧げ，衆神 容を現はす。
百精竝存，福祿自從。	百精 竝存し，福祿 自づと従まらん。
左龍と右虎，主誅鬼凶。	左龍と右虎は，鬼凶を誅するを主どる。
永保所昌，其師命長。	永へに昌んな所を保ち，其の師の命は長からん。
大吉百羊。	大吉にして百もろの祥あらん。

第2聯は「雕刻無祉」のような句を脱しているが、第4聯までは廣漢派の銘文（集釋735）に由來する。また、それは湖南省衡陽市道子坪から出土した「張氏元公」重列式神獸鏡〔湖南省博物館1981〕の銘文とも類似し、「張氏元公」が本鏡から重列式神獸鏡を生みだしてゆくプロセスを暗示している。すなわち、その銘文（集釋744）は、

吾作明鏡，幽涑三商。	吾れ明鏡を作るに，三商を幽鍊せり。
周刻無祉，配象萬疆。	彫刻 止まること無く，像を萬疆に配せり。
白牙奏樂，衆神見容。	伯牙は樂を奏し，衆神 容を現はす。
天禽竝存，福祿氏從。	天禽 竝存し，福祿 是れ従まらん。
富貴安寧，子孫蕃昌。	富貴安寧にして，子孫 蕃昌せん。
曾年益壽，其師命長。	年を増し壽を益し，其の師の命は長からん。

惟此明鏡，	惟れ此の明鏡は，
千出吳郡，張氏元公。	吳郡より遷り出でし，張氏は元公の，
千練百解，刊列文章。	千たび錬り百たび解し，文章を刊 ^{きぎ} み列べしものなり。
四器竝。	四氣 竝ばん。

とある。「張氏元公」は第7聯の「惟此明鏡」以下に作鏡の経緯を記したが、それより前の部分が林裕己〔2006〕分類 Sa の一種にあたる。これは江南の神獸鏡に定着した銘文であるから、「張氏元公」は同向式神獸鏡から重列式神獸鏡を生み出すプロセスのなかで、廣漢派の銘文を改変して林分類 Sa を創出したと考えられる。

残念なことに、この「張氏元公」重列式神獸鏡は不鮮明な圖しか公表されていない。しかし、類似の圖像をもつ「張氏」鏡が湖北省鄂州市郵電局から出土しており、圖 11-6 (鄂州 244) に示した。内區の圖像は「距 (巨)」によって5段に區畫され、建安年間の重列式神獸鏡にかんする林巳奈夫〔1973〕の考證を参考にすれば、最上段は南極老人、第2段は伯牙たち、第3段は鈕の左右に東王公と西王母、第4段は黃帝、最下段は天皇大帝で、左右兩端には龍虎があらわされている。東王公と西王母に華蓋が差しかけられているのが特徴で、鈕の上下に直銘がなく、圖像表現は建安鏡より精細である。外區には銘帶と渦紋帶があり、そのあいだに細かい珠紋帶がある。この外區紋様は圖 11-5 鏡を繼承したものである。外區の銘文を圖録 (鄂州 244) はつぎのように釋讀している。

吾作明鏡，幽三商，周刻無極，□□□疆白牙奏樂，神見周□，天禽□□，福祿壽周
富貴鏡□至，子孫藩昌，□□□見師長命張氏□□君王東無□□□□委。

誤讀と未讀字が多いが、おそらく「張氏」の前は「其師命長」の誤記で、そこまでは圖 11-5 鏡の方格銘と同文であろう。「張氏」以下は不明だが、圖像が圖 11-5 鏡に類似していることからみて、これも「張氏元公」による一連の作品と考えられよう。

漢鏡5期に登場した吳派は、獨創的な畫像鏡を生み出したとはいえ、銘文にすぐれた才能を發揮することはなかった。しかし、この「張氏元公」は、押韻だけでなく、聲調にも技巧をこらした獨特の四言句を創出した。圖像紋様についても、環狀乳神獸鏡の模作よりはじめ、同向式神獸鏡や重列式神獸鏡をつぎつぎと創作していった。銘文をもとに制作の順序を復元すると、圖 11-2 鏡→圖 11-3 鏡→圖 11-4・圖 11-5 鏡→圖 11-6 鏡という4段階に變化していることがわかる。これは環狀乳神獸鏡→同向式神獸鏡→重列式神獸鏡という神獸像配置の一連の變化でもある。しかも、「張氏元公」は「吳郡胡陽 (里)」で環狀乳神獸鏡を制作したのち、そこから離れて圖 11-3 以下の鏡を制作した。その新天地がどこにあったのかはわからないが、そこで新しい鏡種を立てつづけに創作した「張氏元公」が、卓越した技能をもつひとりの鏡工名であったことは確かであろう。

この「張氏元公」が最初に手がけた環狀乳神獸鏡は、その紋様構成からみて、先行す

表1 「廣漢西蜀」環狀乳神獸鏡と「張氏元公」神獸鏡の屬性比較

		法 量			内 區	鈕 座	半圓方形帶			外 區		
		徑 (cm)	重さ (g)	<i>m</i> 値 (g/cm ²)			方格銘	半圓	斜面	内	斜面	外
紀年鏡	延熹二 (159)	11.6	365	3.46	三神三獸	無	1	無	半圓	銘文	無	菱雲
	永康元 (167)	12.3	360	3.03	三神三獸	無	1	無	半圓	銘文	無	菱雲
	永康元 (167)	16.3	868	4.21	四神四獸	有節重弧	4	無	芝草	畫紋	半圓	菱雲
	熹平二 (173)	10.7	235	2.66	三神三獸	有節重弧	1	無	半圓	銘文	無	渦
	中平四 (187)	19.2	1337	4.62	四神四獸	有節重弧	4	無	芝草	畫紋	半圓	菱雲
「張氏元公」鏡	圖 11-1	11.8	256	2.34	四神四獸	有節重弧	1	渦	半圓	畫紋	半圓	渦
	圖 11-2	11.6	220	2.08	四神四獸	有節重弧	1	渦	半圓	銘文	半圓	渦
	圖 11-3	10.2	156	1.91	四神四獸	無	1	無	半圓	銘文	無	渦
	圖 11-4	10.4	155	1.83	四神四獸	有節重弧	1	渦	半圓	銘文	無	渦
	圖 11-5	12.8	314	2.44	四神四獸	有節重弧	4	渦	芝草	銘文	珠紋	渦
	圖 11-6	13.8			重列式	無				銘文	珠紋	渦

る「廣漢西蜀」鏡をモデルにしたと推測される。そこで、表1には「廣漢西蜀」で制作された延熹二年(159)から中平四年(187)までの紀年鏡5面の屬性を示した。内區の神獸像は、樋口隆康〔1979〕の指摘したように、永康元年(167)から熹平二年(173)のころに三神三獸から四神四獸に轉換した。ほかの要素をみると、半圓方形帶の半圓はすべて無紋だが、三神三獸鏡は方格銘が1字で、半圓間の斜面に3つの半圓を並べ、外區に銘文帯があるのにたいして、四神四獸鏡は方格銘が4字で、半圓間の斜面に線描の芝草紋をもち、外區に畫紋帯をめぐらせ、畫紋帯と菱雲紋帯とのあいだに半圓紋帯をいれている。三神三獸鏡は徑10.7~12.3cmと小さく、*m* 値(g/cm²)は2.66~3.46とやや薄手だが、四神四獸鏡は徑16.3~19.2cmと大きく、*m* 値は4.21~4.62と厚い。また、永康元年以降の3面には、鈕座に有節重弧紋がある。

これに照らして圖11-1・圖11-2「張氏元公」環狀乳神獸鏡をみると、神獸像の表現や紋様構成は永康元年と中平四年の四神四獸鏡と類似しているが、方格銘が1字ずつで、鈕座に有節重弧紋、半圓間の斜面に3つの半圓を並べ、外區外周に渦紋をもち、徑11.6~11.8cm、*m* 値2.08~2.34という特徴は、熹平二年の三神三獸鏡と共通する。したがって、熹平二年以降に「張氏元公」は、これら廣漢派の鏡を参照しつつ、半圓方形帶の半圓に渦紋をいれるといった若干の改變を加えて制作したのが圖11-1・圖11-2畫紋帶神獸鏡であったのだろう。それは廣漢派の「尚方」が江南に移って環狀乳三神三獸鏡を制作した180年代〔岡村2011〕とほぼ同時期のことであろう。

これにたいして圖11-5同向式神獸鏡は、半圓方形帶の方格銘が4字で、半圓間の斜面に細線の芝草紋をいれ、外區に珠紋帯をもっている。芝草紋は、ほかの「張氏元公」鏡

には例をみないが、永康元年と中平四年の環状乳神獸鏡には認められる。したがって、廣漢派の情報はたえず江南に流入し、「張氏元公」はそれを積極的に攝取していたのであろう。つづく圖 11-6 重列式神獸鏡は建安元年（196）のそれに先行する可能性が高い。このため「張氏元公」の作鏡活動は、およそ 180～190 年代に位置づけられよう。

(2) 「趙禹」八鳳鏡

八鳳鏡はかつて夔鳳鏡と呼ばれていた。その「夔」について駒井和愛〔1953：71 頁〕は『山海經』大荒東經に「其光如日月」とあることから、鏡の意匠にふさわしい動物とみなし、その命名を支持した。しかし、傳説の禽獸に付會するよりも、その銘文（集釋 721）に「八爵相向法古始」とあるように 2 羽の朱雀（鳳凰）が對向している圖像を主紋とするため、中國で通用している八鳳鏡という名稱が妥當であろう〔西田守夫 1989〕。

八鳳鏡の分類について樋口隆康〔1979：188-192 頁〕は、連弧紋縁で糸卷形四葉紋鈕座のものを A 式、平素縁のものを B 式、連弧紋に渦をいれたものを C 式、蝙蝠紋鈕座のものを D 式、寶珠形鈕座のものを E 式とした。これは周縁と鈕座と連弧紋に着目したものが、分類基準が一定でないという問題があった。このため岡内三眞〔1996〕は、まず鈕座紋様によって、四葉紋の I 式、蝙蝠紋の II 式、糸卷形の III 式、寶珠形の IV 式、という 4 型式に大別した。そのうえで主紋様が圖案化した A 型雙鳳紋はすべての型式にみられるのにたいして、具象的な鳥になった B 型雙鳳紋は IV 式に限られること、無紋の連弧紋は I～III 式にあり、渦や獸紋をいれた連弧紋は III・IV 式にあること、外區は I 式にあって II 式にはなく、III・IV 式はあるものとなないものが混在していること、III・IV 式には連弧紋帯の外側に菱雲紋や雲氣紋の紋様帯をいれたものがあることを示し、およそこの順に變遷したと考えた。しかし、糸卷形鈕座の先端は四葉紋となるのがふつうであるため、I 式と III 式の区分に問題を残した。そこで秋山進午〔1998〕はそれを十字糸卷形と方形糸卷形とに名稱を改め、それぞれを連弧内紋様の有無によって細別した。各論とも糸卷形鈕座をもつ元興元年（105）鏡を最初期に位置づけ、寶珠形鈕座の八鳳鏡を 3 世紀の吳鏡とみなすことでは一致しているが、年代の限定しうる發掘資料が乏しいために、それ以上の編年や制作地にかんする検討はむずかしかった。

この状況を打開したのが原田三壽〔2005〕である。八鳳鏡・獸首鏡・環状乳神獸鏡の鈕にあしらわれた浮彫の龍紋に着目した原田は、それが「廣漢西蜀」「尙方」鏡を特徴づける紋様で、永壽二年（156）から光和四年（181）までの紀年鏡に用いられていることから、龍紋鈕をもつ八鳳鏡を 2 世紀後半の廣漢派の制作と考えた。建寧三年（170）に造營された内蒙古包頭市召灣 91 號墓〔魏堅編 1998〕では龍紋鈕の八鳳鏡が出土し、その年代を補強している。これをうけて筆者〔岡村 2011〕は獨特の銘文をもつ「董氏」や「吳氏」の八

鳳鏡をとりあげ、龍紋鈕をもつ「吳氏」獸首鏡との比較から、それを150~160年代における廣漢派の作品と考えた。

たとえば、圖12-1は河南省新郷市金燈寺47號墓から出土した「董氏」八鳳鏡〔鄭州大學歷史學院考古系ほか2009〕で、隅丸方形に近い糸卷形鈕座をもっている。外區にめぐらされた太ゴチック體ふうの銘文（集釋721）は、

正月丙午日董氏造作，尙方明竟自有紀。青龍白虎居左右。神魚仙人赤松子。八爵相向法古始。長宜子孫。

とあり、「尙方」の發注により「董氏」工房が制作したと解釋できる。

圖12-2は2011年に調査した王綱懷氏藏の「魯氏」八鳳鏡で、鈕座が蝙蝠紋であること以外は、「董氏」鏡と紋様が近似する。とくに日月星紋や九尾狐，魚などをめぐらした外區獸紋帶の構成は類似している。外區的銘文も同じ太ゴチック體ふうの字體で、

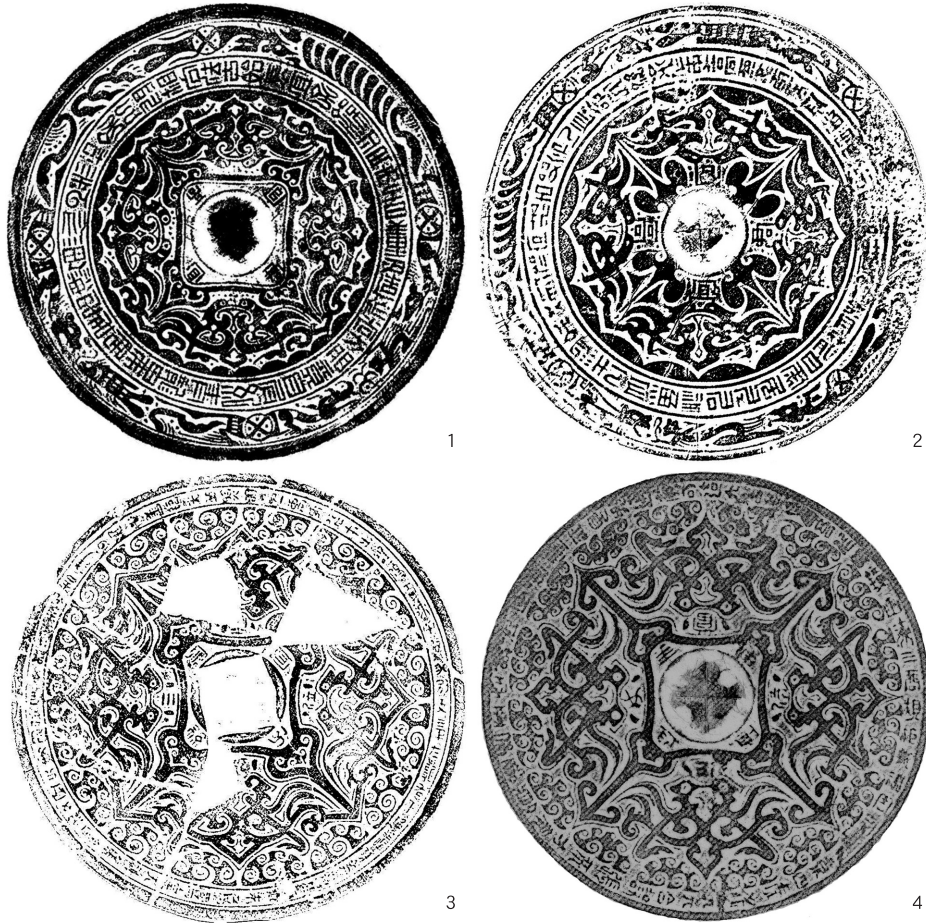


圖12 華西系と江南系の八鳳鏡 1：河南省新郷市金燈寺47號墓出土「董氏」鏡〔鄭州大學歷史學院考古系ほか2009〕，2：王綱懷氏藏「魯氏」鏡，3：孔震氏藏「□禹」鏡，4：黒川古文化研究所藏「趙□」鏡

魯氏□□□□紀。青龍白帟居左右。神魚仙人赤松子。八爵相向法古始。令人長命宜孫子。作吏高遷車生耳。

とあり、圖像を説明した第2～第4句が共通する。第5句の「令人」以下は「吳氏」八鳳鏡にみえ、鈕座銘はすべて「君宜高官」である。このように廣漢派では「董氏」・「吳氏」・「魯氏」らが糸卷形や蝙蝠紋の鈕座をもつ八鳳鏡を制作していたのである。

鈕座の蝙蝠紋は、漢鏡6期の蝙蝠座内行花紋鏡に由来する。内行花紋鏡と八鳳鏡とは、連弧紋をはじめとする平彫りの表現も共通し、北中國で制作された内行花紋鏡の手法が八鳳鏡に取り入れられたのであろう。蝙蝠紋の鈕座をもつ八鳳鏡は、後漢後期の陝西省高陵縣張卜I4號墓〔陝西省考古研究所編2004〕や西安市白鹿原五12號墓〔陝西省考古研究所編2003〕からも出土し、關中地區でも鑄造された可能性がある。このため、ここでは四川から陝西省の一帯で制作されたとみられる鏡群を華西系と呼ぶことにする。

圖12-3は孔震氏藏の八鳳鏡である。それは細かく割れて鈕を缺失しているが、「長宜子孫」と「位至三公」銘をいれた鈕座は隅丸方形に近い糸卷形で、輪郭線をもつ主紋の雙鳳紋、渦紋をいれた連弧紋、銘帯と素紋帯の外區からなっている。八鳳鏡において外區に銘文をもつことはきわめてめずらしく、それは、

惟此善鏡，煥竝照明。	惟れ此の善き鏡は， ^{かが} 煥やき竝びに照明なり。
□禹所作，本出雒陽。	□禹の作りし所なり， ^{もと} 本と雒陽に出づ。
百煉千辟，分別文章。	百たび錬り千たび辟き，文章を分別せり。
左龍右帟，□福除央。	左龍と右虎は，福を招き殃を除く。
對□□鄉，朱鳥鳳皇。	□に對し□嚮かふは，朱鳥と鳳凰なり。
天神集會，祐父宜兄。	天神 集會し，父を ^{なす} 祐け兄に宜し。
男則封侯，女即侍王。	男は則ち侯に封ぜられ，女は即ち王に侍さん。
大吉祥。	大いに吉祥ならん。

とある。末字の「羊」の縦畫を長くのばして渦を巻き、起句の最初に發語の「惟」を置いている。それもふくめて銘文の全體は、圖11-4・圖11-5「張氏元公」同向式神獸鏡のそれとよく似ている。第2聯の「□禹」は本鏡の作者名であり、本來は「本出雒陽，□禹所作」とすべきところを、押韻のために上下の句を入れかえたのであろう。すなわち、作鏡者の「□禹」は「雒陽」の出自で、おそらく「雒陽」から離れて江南の「張氏元公」工房の近くに來たのであろう。特殊な語句だけでなく、末字の縦畫を巻く特徴や「照」字を「昭」と「火」につくる字形も共通する。しかも、内區外周の連弧紋にほどこされた渦紋が「張氏元公」鏡の半圓方形帯の半圓にほどこされた渦紋に類似し、中央の渦を大きく、周圍4か所の渦を小さくあらわす特徴をもつ。このことから、兩鏡工の交流はかなり緊密であったと考えられる。

これに類似する紋様をもつのが、黒川古文化研究所蔵の圖 12-4 鏡である。紋様表現と構成は圖 12-3 鏡とほぼ同じだが、糸巻形鈕座は四葉紋が小さくなり、「玉女當侍」と「□則宜美」というめずらしい銘文をいれている。また、内區外周の連弧紋にほどこされた渦紋が小さくなって底邊 2 か所と周圍 5 か所の計 7 か所に増え、外區銘帯の區畫線を省略するという変化があらわれている。その銘文（集釋 732 注）は、以下のように釋す。

吾作明鏡，幽澗三商。	吾れ明鏡を作るに，三商を幽鍊せり。
規矩無祉，周刻萬京。	規矩 止まること無く，萬疆に雕刻せり。
四氣像元，六合設張。	四氣は元に像り，六合に設け張る。
擧方奉員，通距虛空。	方を擧げ圓を奉じ，距（巨）を虛空に通ず。
統德序道，靈祇是興。	徳を統べ道を序せば，靈祇 是れ興る。
趙□可造，大吉□□。	趙□の造る所にして，大吉□□。

第 5 聯までは林裕己〔2006〕分類 Sd の一種で、華西系の四言句をもとに江南系で創作された銘文である。つづく「趙□可造」の「可」は「所」の意味。『禮記』中庸の鄭玄注に「可，猶所也。」とある。すなわち、「可造」は「所造」の意味で、「趙□」は本鏡の作者名と考えられる。そこで、圖 12-3 鏡の制作者「□禹」と字形を比較し、未讀字の殘畫を勘案すると、兩鏡とも「趙禹」という同一鏡工の名と判断しうる。外周に沿って銘帯をもつ八鳳鏡は、兩鏡のほかにも例がなく、紋様構成もほぼ同じであることからみても、兩鏡は「趙禹」という名の作鏡者によって連作されたものと考えるのが妥当であろう。

これが認められるならば、「趙禹」は「雒陽」から江南に移住し、まず「張氏元公」同向式神獸鏡に類似した銘文をもつ圖 12-3 の八鳳鏡をつくり、つづいて林分類 Sd の銘文をもつ圖 12-4 の八鳳鏡を制作したと考えられる。「趙禹」が林分類 Sd の銘文を用いたのは「張氏元公」が圖 11-6 重列式神獸鏡で林分類 Sa の銘文を用いたのと同時期のことであろう。林分類 Sa と林分類 Sd とは出現時期に差があったのではなく、樋口隆康〔1953〕分類の銘文 S が江南で變異したときのバリエーションであった可能性が高い。

なぜ「趙禹」が後漢の都「雒陽」から南遷してきたのかは明らかではない。しかし、「張氏元公」の活動時期が 180～190 年代であったことを考えると、董卓によって雒陽が灰燼に歸した 190 年の事件が契機になった可能性もあろう。

(3) 華西系から江南系へと展開した八鳳鏡

それでは「趙禹」は洛陽の周邊でおこなわれた八鳳鏡を江南に傳えたのだろうか。答えは否である。なぜなら、本鏡のような八鳳鏡は、もともと廣漢派にはじまり、中原地區で制作された證據がないからである。ただし、漢鏡 6 期の内行花紋鏡は中原地區を中心とする北中國に流行し、その要素を取り入れた八鳳鏡が漢鏡 7 期に長江中下流域にひ

ろがったことは無視できない。それは連弧紋の外側に凹帯と素紋の平縁をもつ八鳳鏡であり、樋口隆康〔1979〕分類のB式にあたる。さきにみたように八鳳鏡と内行花紋鏡とは、平板な紋様表現が類似し、連弧紋や鈕座の蝙蝠紋など相互に紋様を共有する関係があったから、そのなかで内行花紋鏡の凹帯と素紋の外区とを八鳳鏡に取り入れたのであろう。「趙禹」鏡のような作者名を記した銘文をもたないため、もっぱら考古學の方法によらざるをえないが、この八鳳鏡を凹帯式と呼び、鈕座紋様によって2型式に細分する。

凹帯A式：鈕が小さく、糸巻形の鈕座をもつ。

凹帯B式：鈕が大きく、隅丸方形の鈕座をもつ。

鈕座は四葉間が内彎する糸巻形から直線的な隅丸方形へと變化し、それともなって鈕が大きくなる。このため、B式では四隅が狭くなって銘文がしばしば省略される。圖13-1は陝西省寶鷄縣清溪小庵〔董衛劍2001〕出土のA式で、糸巻形の鈕座には「君宜高官」銘と雲氣紋様がある。このようにA式は裝飾性に富み、鈕座の四葉に透かし紋様をいれることが多い。また、連弧紋の弧度が強く、半圓形を呈するのが特徴である。河南省南陽市防爆廠208號墓の出土例〔南陽市文物考古研究所2012〕は龍紋鈕をもち、2世紀後半における廣漢派の作例と考えられる。これにたいして、圖13-2は湖南省衡陽市茶山坳26號墓〔衡陽市博物館1986〕出土のB式で、隅丸方形の鈕座には銘文をいれるスペースが

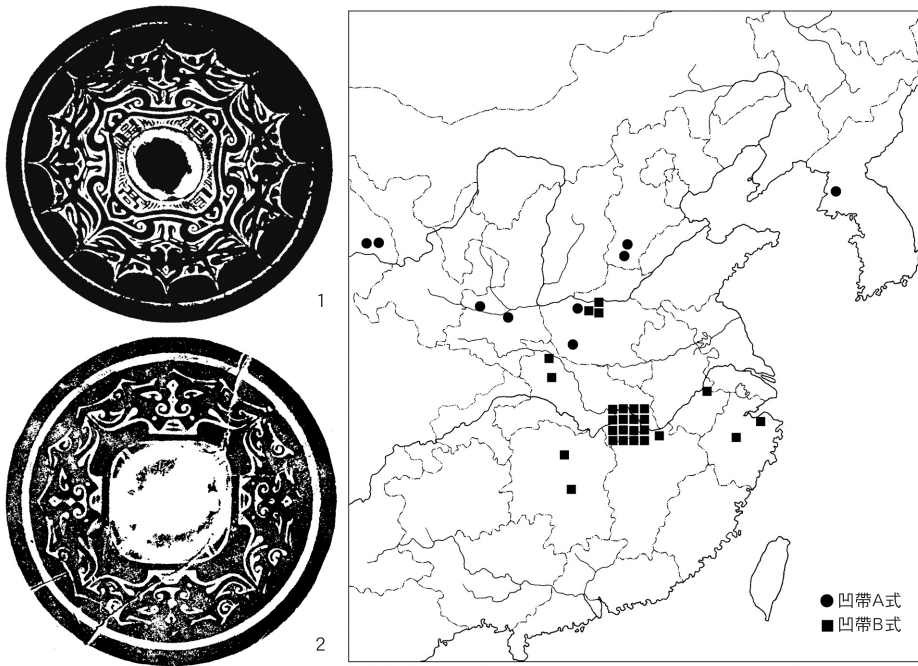


圖13 凹帯式八鳳鏡とその出土地 1：陝西省寶鷄縣清溪小庵出土鏡〔董衛劍2001〕，2：湖南省衡陽市茶山坳26號墓出土鏡〔衡陽市博物館1986〕

なく、主紋の雙鳳紋は幅廣い體軀の表現となり、連弧紋が蒲鉾形に低くなっている。この茶山坳 26 號墓は熹平五年（176）軛をもつ 2 人合葬墓であり、2 世紀後半のうちに A 式から B 式へと變化したと推測できる。

凹帶式八鳳鏡の出土地をみると（圖 13）、A 式は黃河流域に分布するのにたいして、B 式は長江中流域を中心にひろがっている。A 式の出土数が少ないものの、八鳳鏡が廣漢派によって創作され、北中國に流行した内行花紋鏡の影響を受けて凹帶式の八鳳鏡が生まれたことを考えると、蝙蝠座の八鳳鏡と同じように關中地區をふくむ華西系の制作とみてよいだろう。一方の B 式は、湖北省鄂州市の周邊から多數出土しているが、そこが都市化するの吳の孫權が都の武昌を置いた 221 年以降のことであり、B 式にみる鈕の大型化は吳の神獸鏡でもひろく確かめられるから、B 式は大まかに長江中下流域での制作としておくのが無難であろう。

八鳳鏡の年代と制作地を考えるため、一部の型式だけをとりあげて分析したが、改めて八鳳鏡の全體をみると、鈕座紋様にもとづく従來の型式分類は大筋でまちがっていないといえる。すなわち、2 世紀の華西系において糸卷形と蝙蝠紋の鈕座があり、2 世紀後半に制作地が長江中下流域に移轉して鈕座の糸卷形が隅丸方形に變化し、3 世紀の寶珠形鈕座へと展開したのである。

後漢の都「雒陽」から南遷してきた「趙禹」が江南で八鳳鏡の制作をはじめたのは、凹帶式八鳳鏡の制作が長江中下流域に移轉した直後のことである。それと「趙禹」鏡とは、同じ八鳳鏡に分類されるとはいえ、相互にかなり異なっているため、兩者のあいだにどれほどの関係があったのかはわからない。しかし、「趙禹」は江南にもひろがった凹帶式八鳳鏡に觸發されつつ、華西系の八鳳鏡や「張氏元公」の銘文を参考にしながら新しい八鳳鏡を創作し、江南の作鏡體制に新風を吹きこんだ可能性があるだろう。

おわりに

紋様の分類からはじめる型式學的方法ではなく、銘文の作鏡者名を手がかりに技巧の遍歴を追跡する方法によって、後漢鏡における淮派と吳派の展開について検討した。それは、これまでのような機械的に「紋様をみる」方法ではなく、鏡に「人を見る」新しい研究をめざしたものであった。その結果は、つぎのようにまとめられる。

明帝（在位 57-75）のとき、宮廷御用品を制作する工房名の「尙方」から「青蓋」が自立した。かれらは浮彫表現の盤龍紋を創作した有志の鏡工たちで、これが淮派のはじまりである。ほぼ同じころに「三鳥」や「池氏」らも獨特の浮彫式獸帶鏡を制作し、「青蓋」に追隨した。章帝（在位 75-88）のときに「青蓋」は「青羊」や「三羊」などに分裂

し、「陳氏」とともに「青蓋陳氏」鏡を合作するなどの再編成が進むが、いずれも青龍と白虎が對峙する盤龍紋は共通する。「淮南龍氏」も章和年間（87-88）に龍虎が對峙する盤龍鏡をつくるが、龍の表現は「青蓋」らの鏡と異なっている。80年代に「尙方」から自立した「杜氏」は、西域に由來する辟邪・天祿を一對の龍形であらわした。このように淮派では工房ごとに異なる表現の盤龍鏡を制作していたのである。また、「杜氏」らは銘文にもすぐれた才能を發揮した。このころが淮派の最盛期である。

一方、建初八年（83）に「吳朱師」は西王母と東王公の神仙世界をあらわした畫像鏡を創作した。吳縣ではまた「吳向里栢師（栢氏）」や「吳何陽周是（氏）」らも畫像鏡の制作をはじめた。その「吳向里栢氏」は「忠臣伍子胥」を主題とする吳越の故事、「周是」は韓朋の妻「貞夫」の故事を主題とするなど、それぞれに趣向をこらしたモチーフの畫像鏡を制作した。畫像にすぐれた才能を發揮したのが吳派であり、畫像鏡において従來の四神を主とするとする瑞獸の世界から脱却したのである。

吳派は同時に盤龍鏡の制作にも着手した。「朱師（氏）」・「栢師（栢氏）」・「周是（氏）」いずれの工房においても、畫像鏡とはモチーフのまったく異なる盤龍鏡が並行して制作されたが、その龍虎表現はことごとく「青蓋」らの焼き直しにすぎなかった。また、畫像鏡の榜題をのぞけば、吳派は銘文に獨創性を發揮することはほとんどなく、銘帯には樋口隆康〔1953〕分類の銘文Nを用いることが多かった。

吳派の創作した斬新な畫像鏡は、淮派に衝撃を與えた。「建初八年」鏡より後れること8年、淮派の「石氏」は永元三年（91）に二神と「雲中玉昌」・白虎の圖像をもつ畫像鏡を制作した。それは吳派の畫像鏡に独自の銘文と紋様を加えたものであったが、やがて「石氏」は吳派の「周氏」畫像鏡をほとんどそのまま模倣するようになる。「石氏」はまた、最初のうちは「尙方」や「龍氏」に近い表現の盤龍鏡を制作していたが、その盤龍紋はしだいに「青蓋」らの表現に接近していった。しかも、いずれの銘帯にも吳派と同じ樋口分類の銘文Nが用いられている。漢鏡6期には、このような吳派と淮派の交流と融合が活発になり、それが華西系において廣漢派の成立をうながした。

2世紀後半の漢鏡7期に華西系の環狀乳神獸鏡・八鳳鏡・獸首鏡が盛行する。その後半期の180~190年代には「吳郡胡陽（里）」の「張氏元公」が華西系の環狀乳神獸鏡の模倣よりはじめ、同向式神獸鏡、つづいて重列式神獸鏡を創出していった。吳郡の郡治があった吳縣は吳派の活動據点であったが、新しい神獸鏡の創作は「張氏元公」が「吳郡胡陽」から離れて工房を新設したときにはじまった。また、それまでの吳派とは對照的に「張氏元公」は銘文にも獨創性を發揮した。環狀乳神獸鏡の段階から廣漢派の銘文を参考に「自づから衆と異なる」四言句を創作し、同向式神獸鏡から重列式神獸鏡を生みだす過程のなかで江南系に定着する林裕己〔2006〕分類Saを創出した。

同じころ華西系の八鳳鏡が長江中下流域に傳播した。そのなかで後漢の都「雒陽」から南遷してきた「趙禹」が、「張氏元公」同向式神獸鏡に近い銘文をもつ八鳳鏡を創作し、つづいて八鳳鏡の銘文に林分類 Sd の一種を採用した。このような林分類 Sa・Sd は漢鏡 7 期の江南系を代表する銘文となったのである。

以上のように、淮派と吳派の成立と展開を鏡工ごとに跡づけてみると、その流派とは、これまで想定されてきたような地域割りの様式ではなく、それぞれに自立した鏡工を内包し、流派をこえた交流と融合が頻繁にくりかえされていたことによる、流動的な鏡工のまとまりとして理解すべきであろう。それは自立した鏡工たちが、ひとりの作家として自分の名を銘記した鏡を制作し、ときには他地域に移動して作鏡活動をつづけていたからにはほかならない。もちろん作者名を記さない鏡が同時につくられ、凡庸な圖像や銘文の鏡もまた少なくないのであるが、藝術性をもつ鏡とそれらを等し並びにあつかう「紋切り型」の分類と系統論は、そろそろ見直す必要がありそうである。

参考文献

出典略號（五十音順）

- 浦上……浦上蒼穹堂 2009『浦上蒼穹堂 30 周年記念』、浦上蒼穹堂
 鄂州……鄂州市博物館 2002『鄂州銅鏡』、中國文學出版社
 巖窟……梁上椿 1940～1942『巖窟藏鏡』
 古鏡……羅振玉 1916『古鏡圖錄』
 廣西……廣西壯族自治區博物館編 2004『廣西銅鏡』、文物出版社
 上海……陳佩芬 1987『上海博物館藏青銅鏡』、上海書畫出版社
 小校……劉體智 1935『小校經閣金文拓本』
 浙江……王士倫 1987『浙江出土銅鏡』、文物出版社
 浙江修訂……王士倫 2006（王牧修訂）『浙江出土銅鏡』修訂本、文物出版社
 長沙……長沙市博物館編 2010『楚風漢韻 長沙市博物館藏鏡』、文物出版社
 桃陰……梅原末治 1925『桃陰廬和漢古鑑圖錄』、關信太郎
 六安……安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008『六安出土銅鏡』、文物出版社

日本文（五十音順）

- 秋山進午 1998「夔鳳鏡について」『考古學雜誌』第 84 卷第 1 號
 上野祥史 2001「畫象鏡の系列と製作年代」『考古學雜誌』第 86 卷第 2 號
 上野祥史 2003「盤龍鏡の諸系列」『國立歷史民俗博物館研究報告』第 100 集
 岡内三眞 1996「雙鳳八爵文鏡」東北亞細亞考古學研究會編『東北アジアの考古學』第 2・權域
 岡村秀典 1988「西王母の初期の圖像」『歴史學と考古學』高井悌三郎先生喜壽記念論集
 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『國立歷史民俗博物館研究報告』第 55 集
 岡村秀典 2009「前漢鏡銘の研究」『東方學報』京都第 84 冊
 岡村秀典 2010「漢鏡 5 期における淮派の成立」『東方學報』京都第 85 冊

- 岡村秀典 2011 「後漢鏡銘の研究」『東方學報』京都第 86 冊
岡村秀典 2013 「名工杜氏傳——後漢鏡を變えた匠」『技術と交流の考古學』，同成社
小山田宏一 1993 「畫紋帶同向式神獸鏡とその日本への流入時期」『彌生文化博物館研究報告』第 2 集
笠野毅 1993 「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第 13 卷，雄山閣出版
岸本泰緒子 2006 「獸帶鏡に関する一考察」『博望』第 6 號
駒井和愛 1953 『中國古鏡の研究』，岩波書店
「中國古鏡の研究」班 2009 「前漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第 84 冊
「中國古鏡の研究」班 2011a 「後漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 冊
「中國古鏡の研究」班 2011b 「三國西晉鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 冊
朝鮮總督府 1927 『樂浪郡時代の遺蹟』古蹟調査特別報告第 4 冊
富岡謙藏 1920 『古鏡の研究』，丸善株式會社
西田守夫 1989 「中國古鏡をめぐる名稱——陳列カードの表記雜感」『Museology（實踐女子大學博物館學講座）』8
濱田耕作 1922 『通論考古學』，大鏡閣
林裕己 2006 「漢鏡銘について（鏡銘分類概論）——樋口分類補正試論」『古文化談叢』第 55 號
林巳奈夫 1973 「漢鏡の圖柄二，三について」『東方學報』京都第 44 冊（同『漢代の神神』，臨川書店，1989 年に再録）
原田三壽 2005 「鈕文様を持つ鏡について」『立命館大學考古學論集』IV
樋口隆康 1953 「中國古鏡銘文の類別研究」『東方學』第 7 號（『展望アジアの考古學 樋口隆康教授退官記念論集』，新潮社，1983 年に再録）
樋口隆康 1979 『古鏡』，新潮社
湊哲夫 1990 『美作の鏡と古墳』津山郷土博物館特別展圖録第 3 冊
森下章司 2011 「漢末・三國西晉鏡の展開」『東方學報』京都第 86 冊

中國文（拼音順）

- 程長新・程瑞秀 1989 『銅鏡鑑賞』，北京燕山出版社
董衛劍 2001 「寶鷄縣博物館藏歷代銅鏡選介」『文物』第 9 期
廣西壯族自治區文物工作隊・貴港市文物管理所 2006 「廣西貴港深釘嶺漢墓發掘報告」『考古學報』第 1 期
郭錫良 1986 『漢字古音手冊』，北京大學出版社
衡陽市博物館 1986 「湖南省衡陽市茶山坳東漢至南朝墓的發掘」『考古』第 12 期
湖南省博物館 1981 「湖南衡陽縣道子坪東漢墓發掘簡報」『文物』第 12 期
梁上椿 1940~1942 『巖窟藏鏡』（田中琢・岡村秀典譯，同朋舍，1989 年）
劉心健・劉自強 1983 「山東蒼山柞城遺址出土東漢銅器」『文物』第 10 期
劉紹明 1996 「“天公行出”鏡」『中國文物報』5 月 26 日
南陽市文物考古研究所 2012 「南陽市防爆廠 M208 漢墓發掘簡報」『中原文物』第 3 期
容庚 1935 『古鏡景』哈佛燕京學社藏器
陝西省考古研究所編 2003 『白鹿原漢墓』陝西省考古研究所田野發掘報告第 23 號，三秦出版社
陝西省考古研究所編 2004 『高陵張卜秦漢唐墓』陝西省考古研究所田野考古報告第 32 號，三秦出版社
紹興縣文物保護管理所 2002 『紹興縣文物志』，浙江古籍出版社
唐金裕・郭清華 1983 「陝西勉縣紅廟東漢墓清理簡報」『考古與文物』第 4 期
王牧 2006 「東漢貞夫畫像鏡賞鑒」『收藏家』第 3 期

王趁意 2011 『中原藏鏡聚英』, 中州古籍出版社

王仲殊 1985 「吳縣, 山陰和武昌——從銘文看三國時代吳的銅鏡產地」『考古』第 11 期

魏堅編 1998 『內蒙古中南部漢代墓葬』, 中國大百科全書出版社

鄭州大學歷史學院考古系・河南省文物管理局南水北調文物保護辦公室 2009 「河南新鄉市金燈寺漢墓發掘簡報」『華夏考古』第 1 期

周世榮 1986 「湖南出土漢代銅鏡文字研究」『古文字研究』第 14 輯, 中華書局

歐文

Karlgren, Bernhard 1934 Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6

【補記】本稿は「中國古鏡の研究」班の成果報告であり、「後漢鏡藝術論」を課題とする 2011 年度日本學術振興會科學研究費補助金（挑戰的萌芽研究）の調査成果の一部を用いた。2011 年の調査にあたっては、班員の森下章司氏と向井佑介氏が同行し、上海の王綱懷氏、漢雅堂の黃洪彬氏、浙江の孔震氏と王牧氏のほか、諸暨博物館、上虞縣博物館、紹興縣文物保護管理所から多くの便宜をえた。また、國內の所藏鏡については、和泉市久保惣記念美術館、浦上蒼穹堂の浦上滿氏、黒川古文化研究所、五島美術館、泉屋博古館のお世話になった。末尾ながら、ここに厚くお禮申しあげます。なお、本稿の圖キャプションに典拠を記していない鏡の寫眞や拓本は、筆者らの作成したものである。